

惺陰毫録

七

昭和八年十一月下迄筆

特別  
14  
1919  
455



借陰老録

昭和八年十一月下浣起筆

○今次関西の紅葉狩、多分前巻に記した如く、  
 京都より此の朝人びり、此氣持よくうを愉快を感ず  
 べ、田朝から酒を飲まらるゝ京都の松林に隈ることか  
 ち、夜深く腹をこゑんを飲まると、此此土に居る心こ  
 ち、幸い一行寸、酒友も此合道木の甲乙七のた。自分の  
 室、又七の所が較々居るのた、この合合本がある。此室  
 又、舞妓を画して金原風が立て、あつた、この自述、  
 擬七人の、のりこと、いつ十年未だ十款合の字と作す

田能村竹田 水墨米法山水圖



(竹田四十九歳之作)

(竹田翁九疊帖中之一頁)

時、序に末の肉を、下名の表紙が、保代京都に、末の  
も吾等と、初い末の、圓ら、活き、の、入を、得、の、か  
一行悦、入、の、念、道、承、連、の、お、倉、の、料理、の、懐、の、か、特、と  
辻留、の、仕、出、と、注、文、と、此、の、辻、留、の、折、傳、と、有、名、と  
割、豆、を、ある、が、自、分、の、折、傳、を、知、る、が、此、家、の、調、理、を、口  
より、今、分、の、始、め、の、妙、の、ま、美、食、に、言、を、教、へ、此、西  
京、の、料理、の、流、石、と、言、正、と、一、用、の、ある、研、の、十、款、の  
濃、布、を、教、家、の、画、の、色、詞、を、と、強、く、ん、の、研  
李白、駐、杖、秋、風、夜、渡、  
紅、雲、白、水、を、書、し、此、秘、伝  
の、主人、が、何、の、色、の、書、物、に、色、色、と、嘯、で、ん、こ、ん、の、一、也、  
い、つ、と、京、都、の、活、字、の、骨、華、房、と、通、る、こ、と、の、例、の、ある



か、今、の、下、手、物、漁、り、を、や、ら、う、と、い、ふ、の、が、ある、四、條、の  
りの、時代、を、呼、ぶ、一、派、を、指、さ、る、見、也、旅、の、無、用  
の、長、物、か、ら、何、に、披、し、出、す、る、一、息、の、あ、つ、た、京都、の  
系、と、あ、つ、た、有、福、如、字、の、資、料、と、る、  
や、う、る、よ、の、か、性、と、ある、自、分、の、今、を、得、れ、の、昔、  
の、慧、東、に、附、属、する、魚、代、を、目、の、千、日、入、の、幾、の、四  
方、を、包、む、銀、の、魚、が、上、尾、慧、つ、豆、と、い、ふ、外、は、古  
名、の、ある、稻、米、一、粒、と、の、流、初、年、刊、行、の、圓、書、の  
宣、傳、の、う、と、板、を、得、た、あ、ま、が、有、位、と、吹、く、の、か、ま  
け、さ、ら、る、の、れ、可、き、う、一、也、  
大、丸、呉、服、店、の、主人、下、村、が、近年、烏、丸、の、家、の、  
を、改、進、し、て、西、洋、家、の、  
と、う、く、に、こ、の、改、こ、  
の、つ、て





# 一 高變遷史系統圖解説

寛永七年、林羅山が徳川家光から賜はった忍岡の地に建てた書院——これが學校といふものゝ起因であつて、尋で寛文三年羅山の子の鷲峰が徳川家綱から弘文院學士の號を賜はつたのでこれを弘文館と稱してゐたが、元祿三年徳川綱吉の時大成殿と共に湯島の昌平坂上に移り、後幕府の學校となつて昌平坂學問所（俗稱昌平學校）と稱した。

明治二年六月、昌平坂學問所を大學校と改め、同年七月大學校の職制を定め、之を以て一の官廳となし、集議院の次、彈正臺の上に列し、長官を別當と稱し、大學校及開成所、醫學校の二校並に病院を監督し、國史を監修、府藩縣の學政を總判せしめたが、同年十二月、大學校を改めて大學とし、四年七月、更に大學を廢して文部省を置いた。

かくて昌平坂學問所即ち昌平學校は官廳たる文部省となつたが、學校そのものは二途に分れて系統圖面の如くに發達して行つた。一は翻譯局から發生し、一は種痘館から發生し、合併して東京大學となるのであるが、この翻譯局といふのは文化八年始めて淺草藏前片町にある天文臺中に置いた。そして安政二年天文臺内から九段坂下に移して洋學所となり、安政三年二月更に著書調所と改稱して翌四年一月に開校式を擧げたが、萬延元年六月神田小川町に移り、文久二年一ツ橋外護持院ヶ原に新築、五月十二日移轉と共に洋書調所と改名した。翌三年

これが昌平學校の所管となつて開成所と改稱したのである。一方、安政四年佐賀の藩醫伊東玄朴等西洋醫術を修めた者が相謀つて、神田お玉ヶ池に種痘館を建て、兼て同學講習の場に充ててゐたが、安政六年下谷御徒町和泉橋通りに新營、萬延元年十月に至つて幕府直營となり、種痘所と改稱したが、更に文久元年十月西洋醫學所と改め（後醫學所と稱し明治元年復舊稱）明治二年昌平學校に管轄せしめると共に醫學校と改稱した。

開成所並に醫學校は幾多の變遷を経て明治七年には東京開成學校となり、東京醫學校となつたが、明治十手四月兩方を合併して東京大學（現在の東京帝國大學）となつたわけである。

明治二年一月、開成所に始めて英佛二ヶ國の語學科を置き尋で獨語科を置いたが、六年八月に至り、外務省に設けた獨露清語學所を文部省の管理に入れた際、開成學校の語學生徒と併せて外國語學校の教則に據つた學校を設けた。これが即ち東京外國語學校である。然るに翌七年十二月になつて、東京外國語學校の英語科だけを分離して東京英語學校なるものを設けた。これが一高の前身ともいふべきものである。

東京開成學校及び東京醫學校が合併して東京大學が設立されるや、

正十二年四月  
・葉醫科大學

雲峰が徳川家から弘文院學士の號を賜はつたのでこれを弘文館と稱してゐたが、元祿三年徳川綱吉の時大成殿と共に湯島の昌平坂上に移り、後幕府の學校となつて昌平學問所(俗稱昌平學校)と稱した。

明治二年六月、昌平坂學問所を大學校と改め、同年七月大學校の職制を定め、之を以て一の官廳となし、集議院の次、彈正臺の上に列し、長官を別當と稱し、大學校及開成所、醫學校の二校並に病院を監督し、國史を監修、府藩縣の學政を總判せしめたが、同年十二月、大學校を改めて大學とし、四年七月、更に大學を廢して文部省を置いた。

かくて昌平坂學問所即ち昌平學校は官廳たる文部省となつたが、學校そのものは二途に分れて系統圖面の如くに發達して行つた。一は翻譯局から發生し、一は種痘館から發生し、合併して東京大學となるのであるが、この翻譯局といふのは文化八年始めて淺草藏前片町にある天文臺中に置いた。そして安政二年天文臺内から九段坂下に移して洋學所となり、安政三年二月更に蕃書調所と改稱して翌四年一月に開校式を擧げたが、萬延元年六月神田小川町に移り、文久二年一ツ橋外護持院ヶ原に新築、五月十二日移轉と共に洋書調所と改名した。翌三年

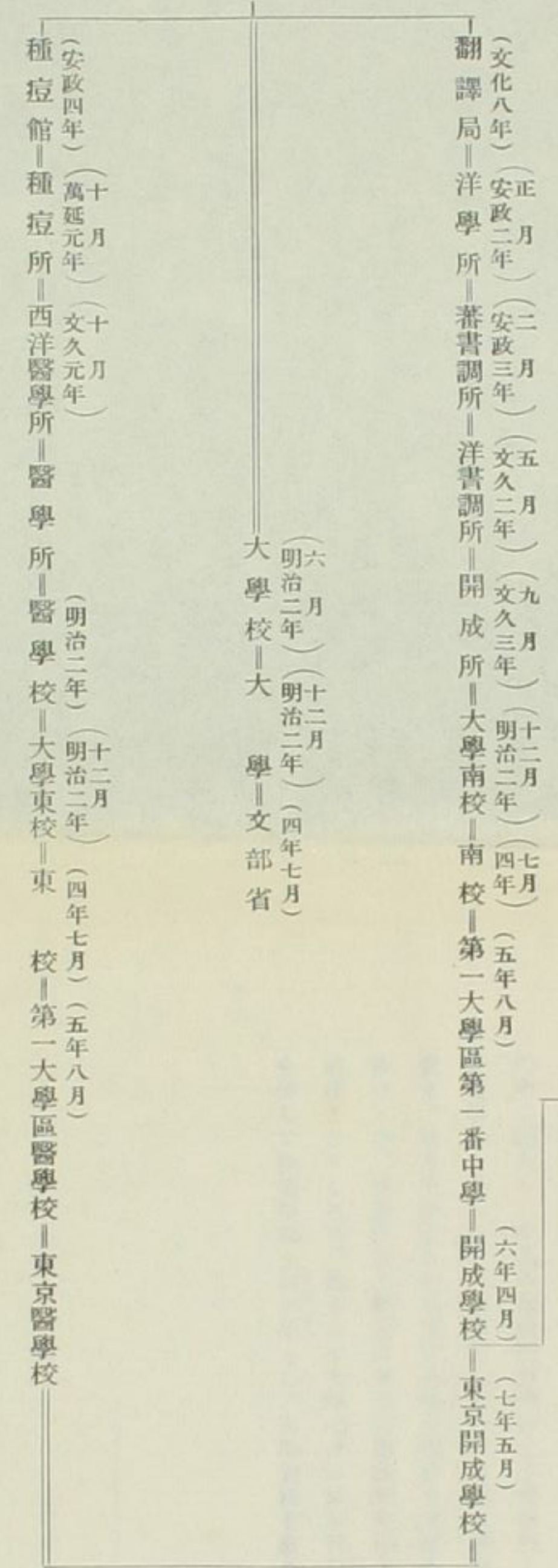
て、神田お玉ヶ池に種痘館を建て、兼て同學講習の場に充ててゐたが、安政六年下谷御徒町和泉橋通りに新營、萬延元年十月に至つて幕府直營となり、種痘所と改稱したが、更に文久元年十月西洋醫學所と改め(後醫學所と稱し明治元年復舊稱)明治二年昌平學校に管轄せしめると共に醫學校と改稱した。

開成所並に醫學校は幾多の變遷を経て明治七年には東京開成學校となり、東京醫學校となつたが、明治十手四月兩方を合併して東京大學(現在の東京帝國大學)となつたわけである。

明治二年一月、開成所に始めて英佛二ヶ國の語學科を置き尋で獨語科を置いたが、六年八月に至り、外務省に設けた獨露清語學所を文部省の管理に入れた際、開成學校の語學生徒と併せて外國語學校の教則に據つた學校を設けた。これが即ち東京外國語學校である。然るに翌七年十二月になつて、東京外國語學校の英語科だけを分離して東京英語學科なるものを設けた。これが一高の前身ともいふべきものである。

東京開成學校及び東京醫學校が合併して東京大學が設立されるや、

弘文館(元祿三年)  
 昌平坂學問所(俗稱昌平學校)



(文化八年) (正月) (安政二年) (二月) (五月) (九月) (十二月) (四年) (五年八月) (六年四月) (七年五月) (十年四月) (十九年三月) (三十年六月)

開成學校 語學科 (七年十二月)  
 東京英語學校 (十年四月)  
 東京外國語學校 (廿七年六月)

第一高等學校 (廿七年六月)  
 千葉醫學專門學校 (大正十二年四月)

東京大學 帝國大學 東京帝國大學



の英國い若者の詩人ロングフエローも又その景徳鎮の陶窯を祀る。くたの詩がある。

"And bird-like poised on balanced ring  
Above the loom of King-to-Clung,  
A burning loom, or Seaming 20-  
Three thousand furnaces that glow  
Incessantly, and fill the air  
With smoke upraising gyre on gyre  
Of jets and flashes of red fire."

の自分の二冊の隨筆ハッルスビーとトビト共々最早や  
を本さんとしてゐる。春成らむ出す、春成代録。

最後の校舎を控へた早大図書館の大石地蔵は  
と本校正統の報に未だ。校敷は下を六百  
とすのれとすてゐる。理因は喜んでさふまゝ先生の地蔵  
は我何とす。自今が校舎も其の内容の面白い  
おぼしめあふ、實に他人が後にも何人と感ずるに  
さうか、殊に若い人がどう感ずるにあらうか、その月  
旦をわたりたいと内々思ひあふと、出版元の中央出版  
社の控在校舎西出口一階とすふ人、物人、時出  
口の云ふまゝコンナ面白い地蔵の初めは校舎に  
飾り面白いがツイは釣えを免せす。誤植を氣  
付かす。後(さ)は危険なあつた位だと云ふれのみ、  
初めを面白いと感ずる。自分のみかま、その年の春



人が強く感ずるものか、必ずしも一般に受けざるに非ざるに  
理由の無い。之れを以て自ら、其の地味や、その  
書に關する十数編の七知のつてゐる、人物は七十餘  
篇加つてゐる、皆興味本位のよきもの、全篇面白  
いと云ふ得、その言ひ過ぎとあるやうに思つたが、  
わし両古くまゝと云ふことも、傍らと笑つた、他  
の一冊は物産雜誌、就その評判のよきもの、  
我が自分の思惑は、たゞ七代作の、徳らまゝと考  
へてゐる。自分の見張、開する面倒のことか、多し、  
●人受けが、いかにいかに思ふところ、(十一月十七日)  
○いつて西洋建築の家の裝飾、四や鉢、  
あるのを、めま、或いは、此等、時を食ふか、あ



つから、甚だ、秘出つて、よく、錦手、が、  
や、七、飾、の、物、柄、の、  
柄、の、用、の、東、洋、の、物、産、を、珍、しく、  
事、と思、い、さ、す、七、西、洋、の、味、の、低、く、  
想、を、つ、く、と、あり、此、次、大、河、の、正、敷、の、陶、片、を、  
ん、と、見、ると、日本、と、西、洋、の、陶、磁、器、の、お、お、を、  
の、が、ま、ん、の、振、り、日本、の、陶、磁、器、の、純、粋、の、美、術、  
品、と、して、ハ、る、と、意、用、と、ん、の、藝、術、品、と、して、  
意、用、と、斯、の、狙、い、お、お、と、ある、の、が、西、洋、の、陶、  
磁、器、の、純、粋、の、美、術、品、の、中、間、入、と、して、  
意、用、と、斯、の、狙、い、お、お、と、ある、の、が、西、洋、の、陶、  
磁、器、の、純、粋、の、美、術、品、の、中、間、入、と、して、  
意、用、と、斯、の、狙、い、お、お、と、ある、の、が、西、洋、の、陶、  
磁、器、の、純、粋、の、美、術、品、の、中、間、入、と、して、



往昔今日のちのち。博士の老若も一年前の先輩で二十  
の年を一期として取られた。明治元年の生れと云ふから自分  
やうのと同甲である。陰幕がキリキリ敷式で行りんれの  
かあの酒豪が卯齋教行をいふつれいことを初めて知  
りて感一に。博士の年大を卯の早稲の大なる高き高き枝  
ぶに教鞭を執り、南堂も高枝の枝をいふあつれに。経  
論が力の専攻であつれが、風味の富厚な英文であつれ  
やうである。どこの高枝の経論の題目をいふ力をい  
ふ授業時々の経論の概論のふいふをいふ富厚な英文の  
訳やしやれを聴くことを喜んれが、高枝の南堂のいふ  
を原に別々富厚な英文が起つれ。山崎は元々いふ(博士)  
七三を大なる教のつれ一人れが、後、漢語もよくいふ

漢語

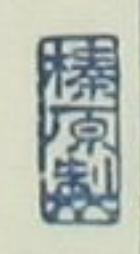
和の語の三三三

いふ、経論の史の漢義が一向進まらぬ。其のいふ  
ふれことかあると語つれ。博士のいふも石原漢子む、マ  
に経論の漢義をいふやうな人がいふつれ。教育のツメ  
コにを非といふか、いふか、鬼角文を風味が女の  
人を支配したやうに、何ゆゑに早くに沙汰の大セロ  
と漢文の漢義をいふ。浄瑠璃を英譯してつれ。七、八  
んと改題を讀み改めたり。時々の学生は漢義を  
目して英譯せしめたり。日語も英文の書けと生徒  
の勧めで自から草してやつれ。城内の所長は  
とも早く和田垣から始めれとも云ひ得るつれ。思ふ  
ハ、自人のいふつれ。彼の家を訪ね、ゲイテのアアウ  
スト全書をいふ。朗讀的に讀んだ。

白穂と名の巧拙に驚きいたることある。その人、米米の文  
言の教師であつた方がよくはまつたかに思はるゝ。その  
人の性々詠讀を弄して復々爲長即あの稱漢も  
悔しむ。あの人のしゃべり休むつゝも上へもあつた。且つ輕  
ぬむであつたが、あの人の親交した人から聴くゝ、いや  
しむ者も前々人知れず苦心して練つたよふたと云ふ、  
席上流宛をむむ前かゝ工風して傍らのあ人の  
よりあ人の批評やお談をきふたこともあつたやうだ。  
内實細心の人があることが起すむを。あの人の吐言  
と云ふ隨筆を出したか、宛向を信つやうなやうな友人の  
君の流弊を吐言と云ふと云ふと、感言言下るも  
のよからう。向か吐言からと云ふは、いふ由長即あの

云ふてよからう。あの人の西洋文藝家の言の短々眞を感  
し、まゝと和訳したかどうかい、遠く断り難いが、西洋  
文藝の送るを集めた本を不物として、まゝと十年  
七自人が傳へたことある。まゝを譯出したか、余の  
隨筆、響の泡にである。随分酒量もあつた、あの人の  
が洋のいふ時、回りの人に、海尾が頼む、ウエスキー  
を生か、飲まうといふ。一杯以上飲まうといふ。あ  
とあつて、始終監禁したと云ふ話も、友人から出た。あ  
の通り石橋後神子であるが、地歩を止めたことを忘  
れず、外回、往つても、目利着者と三浦公使、報じて  
公使をして挨拶の爲め、訪問せしめられたら、むむ其の  
一例かと同一人が往つた。博士の回復する自分の烟

威也丹後直平也其の比が故人と云うて、今の木村氏共と  
 井上推次郎とあるのみ也。井上は信長家也跡居しその子  
 比が木村も其也也其十年目に出遇つ也。要するに此の  
 人の特長の字多うある人の主身也其を案し其日数と云  
 うと云ふか。○と云は漢名如の文人氣質があつて、  
 自娛的と一世を終つ也。友人の考あるも利貸も累を  
 己晩年と傳金かぬけるころと目せ云りてある。持  
 士の交わりは長田秋傳、三田重心、洋書家川村<sup>持</sup>権  
 といふかある。皆ツムじまのりてある。その名の義理の  
 考らマシメる友人井上、平次、山崎といふは、  
 考まらん。此の日に拾う七博士の忌辰(十八日)とあるは、十四  
 年前七月の此日に歿した。此の考の人多う、早稲田側



七八皆に差廻したるを余ひとし、臨終して一場の追憶  
 話を七試みた

十二月十九日

口十月廿一日敬策中一文科書ニ於七一二の孫籍七



講八、左の如し

一足利時代写本

甘露寺親長卿真蹟

百官唐名 年中行事 合本 一冊

百官の末尾ニ云ク

右百官唐名併中御門中納言宣紙

手紙合写之記

年中行事の末尾ニ云ク

干時左少弁元長六月會登山之時予

同登山於西尊寺院勅使房文の十年

六月六日六月合式日延引自六月四日始

探察使藤親長

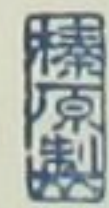
親長ハ有名人の記録親長記の篇者也  
此書七と谷森善正の珍巻也巻三  
善正自筆の極札を貼す  
紙入價五十圓也

一元禄六年四月刊

能優卷詞

玉印皆之登 秋野浮之登 谷崎之登  
生好新事也

のちめことばを刊す、枚数十四枚  
皆能優の正本に極、價三十圓



外ニマツリ一枚購入

但徒一人を其芸測 案山子と詠す  
持るハ其詩ハ云々

田間惟之三 日夜不知度、破ハ三傾  
何處、敗テ堅自持、陶然駈馬在  
猶若鎮狐醒、溝壑元為分、宣夏  
夜棄時 亦兼云々

亦月庵中子外ハ此東傳待令  
此之程々ハ其把撰卷ハ出し  
扶夫在之卷ハお中り扶他付  
ハ一笑可ハいん

余は山子に思を感して書畫のこ  
れに用するも見るに随つて筆中のこよとす  
こん七世の筆中一置のんとす

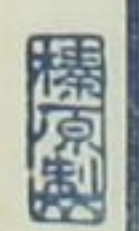
のり神宮外苑の一書畫としてゆ次天皇聖徳  
俗畫館を建設した其の聖書畫が十数年を  
経て居るも未だ全部出来上りは八十枚の内漸  
やく五十枚出来りて奉賛金も四十枚を履  
裁し之を乾巻として頒布するに事あり  
自今七部を購ひ求めれば陛下の御聖蹟を  
するの心あるから書畫が限らるゝとて  
聖書畫と御関係の人物の言定て書か  
れんか、是を筆者と歎したること  
成るべしとてあるも是

未だ全部完成するに及ばず此故に  
書畫の豪華にして宮殿に飾るに  
あり、筆者も區りてあるが中  
に、向世の画名に知らるる人も  
あり、信頼あるものも萬以上の  
謝筆を拂へば、その心儀は二千  
三〇〇千を拂つたものとす、  
仕末は、不問であるが、免  
し、現在の画壇は、第一流と  
呼ばるゝ面々、か、此、と、  
述べて、あるもの、古、の、  
感、か、ある、最、初、の、  
書、畫、家、の、思、入、り、の、  
ゆ、故、に、聖、代、の、書、畫、  
術、を、百、代、に、示、さん  
と、す、る、の、画、家、を、し、て、  
自、内、に、其、の、書、畫、を、  
選、び、し、て、一、代、の、  
傑、作、と、し、て、出、来、る、  
と、す、る、に、決、





と蒐集すまゝに政程を教へたる相成りし。この  
の家は女主人の遺言も亦却てすること例ひあ  
ふが青木家のいかに保存すまゝとまゝしめぬ人  
も本は友人の打一天中が起る言ひあつたのを見  
か加賀が其村の御成で過つたこと妙あり其後  
既に病んでおられた。後問も致し  
○若御回御後、漸く京都の文人がいろくエロク  
クの點を致ししことが口碑も待たつておる。青木  
が柏崎の女郎に思ひて女郎の厚をこれのこと  
といふも記したること七あるが曰く「高屋が昔は  
その次第のこととつて此の人の評をすくなくあ  
るをさうし高屋の屋根の一家を傳へた



屋根の家のあまの窓のあつたことか  
び女主人の致すこと高屋が女主人を老い  
外から屋根の草一見物を頼まんとよ  
う高屋根を〜〜〜見物をやつたことと  
○つとまの此に高屋が我々の高屋根の十  
二ヶ月とまの横柄が〜〜家と珍重せん  
まが〜〜や  
○日本の内磁器の内は外四人の鑑賞するの樂  
の先心は屬するものがある。大抵の内磁器  
轉輾が〜〜地を伝へてゐる。然る樂の  
こと、轉輾を用ひす、手づくものが多い。金  
づくもの多きを伝へること、支那も相轉

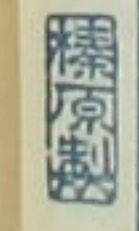






むと凡作家の及びむのうぬとある

のふ戸徳川の所三家の一で徳川氏の大切な親族である  
のん早く先園の時分勤王の志があつたとするものも  
めらいつと、よくいぬることもある。日本の四休からよく  
ハ白王室に親し將軍ハ臣禮を取らばきかある、あ  
らか勤王家むあつてもあつたのすのやうむもあるが  
一家の私からよくハ勤王の提唱ハ徳川の西野府を  
覆す蜂もむもあるつて、實ハ徳川氏側の林有也むある。  
先園ハ曾祖む朱子なる派の学有む大義名分を重んず  
る人むあつたと云ふ、事實さうむもある、後世先園も偉  
人扱ふてあるのむ理由の無いことむいふ。保ハ徳川氏  
の全盛時代ハいくら徳川家ハ親親の關係があらか



らと云ふて、よくむ遠慮する、勤王提唱をやつたよぬ先  
園ハ大日本史を著し、楠公の碑を立て、京都の殿上人  
と交り、嘗ての有栖川家と持中ハ徳嗣を連入  
と主張したることある、此等ハ皆徳川家威がらむ  
むある。先園のさうく、剛愎の人む希な中、ハいつむ  
手こすむ。ハんむもさむ起ると、晴徳ハあ戸公御  
先中ハ非常ハ骨が折れた。あハ徳川氏の忠つ  
むある。あの人ハ終ハ隠退し、むハ自中むむさ  
諭示隠居むあつた。多隱居も文をさくハ若むハ  
りてある。あ後ハ大日む史を著し、楠公の碑  
を折て、京都の殿上人と姓復し、むハ、兼  
先園の書き残したよぬ、就むも未だむさうも

臣に比らざるものなりと徳川家に勅し不ぬの事と云  
ふてある或る時の徳嗣問題に先國の従分行いん  
らうのむ、その不承を勤王に漏くしと云ふ後七女  
の如きと勤王提唱の不承の一形式である尾張  
家も同じことと云ふのむ、先帝の徳嗣へはと  
先帝も尾張も都連さん此氣味がある。先國の自公  
の庭園に伯夷お齋を祀つてあるやうな性格の人が現  
癖の凝り固つた人があつたと云く、固執する幕府  
のタテをつく人があつたのむ、其の庭園がどこにある  
と云ふ、その庭園の隆倒は命を大いする助けと  
し、此の日本の仕合と云ふ事を得ぬ。

○臥薪嘗膽の園獨を傑しびロソトラーをてて園政を執らして



○系部書苑は文庫に於て其の所蔵の宋本を陳  
列す日心堂の四と受けしものか文庫所蔵の宋本  
七種は石印の爲り世に傳へ代る書影

冊を購ひ得て仔細に翻刻し長観に代へ此書影  
今日陳列の宋本四十種を考証し且つアラリシ  
し一六十枚を定物代りあるは此の定物を  
辨せしむ是も勢嘉永の宋本の百十枚あるの  
陸心源の日本公多敷と占めてあるが此の書影に  
凡ゆる其の善本を照入れり其の書影に  
時に書影を發行し此の書とするは是(十一)  
月廿五日記

○伏見宮持基王殿下が徳助あらせしと四巻奨勵  
令書の日法印刷令代を表彰あらせしと由を  
日心堂長村義龍男より申し候せん時三十一  
日八帝四本テんが表彰状の殿下親授あらせし



このとき、先業を感せざるを得ない。今現在新下有  
力の印刷会社を本社と併せて四社と認めらるゝのである。  
こんまも本社が表彰せんといふのは何故である。不審  
と思ふのは、今もいふの通り、入つたから、自分も出  
席して其教授を受けし心組である。此日一福善を  
得たといふのみならず、或る印刷術研究家が、或る高  
明を商して、吾れに來り授けしことである。此人の  
印刷の人は十数年前美術の技を卒業して、印  
刷術の意味を有する。伊谷に授けし技の採給を  
授けしるゝ。十二年の長い間一日も怠らざる印刷  
術を研究し、西洋を無いたるの事と云ふし  
其日十数件に及んである。今いふ印刷会社は

印刷

て七回印刷の印刷と云ふを凝してあるが、どうもこうも  
あゝ、吾れも其の行法つてある。此人は、此の行  
法を解決して、充分経済的とせし得る。云ふを  
此、此人の志は、吾れも其の志が、吾れも其の志が、  
今社の機械を、<sup>一か</sup>心で見たことが、無いらぬ。田舎の  
つて、寝食を忘れて、研究のやうにも、<sup>一か</sup>心で見たことが、  
印刷の、此の、此の、此の、此の、此の、此の、  
入つた、吾れも其の志が、吾れも其の志が、吾れも其の志が、  
於て、吾れも其の志が、吾れも其の志が、吾れも其の志が、  
う、此の、吾れも其の志が、吾れも其の志が、吾れも其の志が、  
も、吾れも其の志が、吾れも其の志が、吾れも其の志が、  
言ひて、吾れも其の志が、吾れも其の志が、吾れも其の志が、

の困乏にことがあつれば、近來と云ふ個人經營の会社が、専ら  
 あり、投してから其の面目と一新し、今いどの会社も優  
 越の味を傳してゐる。ふも天祐の旨いふもあつたが、吾  
 ん自から研究せぬと、ぬいよを他人が先から奪つて  
 めう、これより其の十年研鑽の結果を齎らして  
 投して來たの、定は上の上の社會を、人を奪つて  
 したる、其の印、世界美の的と、さういふ、這つ  
 ても、その詳細を、さういふ、時、さういふ、今  
 ハ、比、大、案、を、さういふ、さういふ、  
 十月廿五日記

標原

賣品ならざる賣物

早大理事 市島春城



支那の詩人は、  
 曰く、百金  
 駿馬を買  
 ひ、千金  
 美人を買ひ、  
 萬金高爵を買  
 ふ、何んの處にか青春を買はんと。  
 馬こそ商品であるが、商品にあら  
 ざる美人も勳爵も金次第で買ふこ  
 とが出来ぬ。唯何としても青春だ  
 けは金で買ふことが出来ない。青  
 春一たび去れば復來らずで、これ  
 だけはどうにも仕様がなない。人身  
 賣買は出来ぬと法律にあつても、  
 實際に於て尤も收穫の多い賣物は  
 嬋娟たる美人と云ふ動物である。

ちんちんを奪つては去るべ  
 きと我々も思ふ

十二月號、地所所載

して賣買が或る形式で行はれる。  
 價は何で定めるかと云ふと、賽  
 錢の多寡と寺社所屬の資産の大小  
 とがこれを定める。寺社の首領の  
 交遊の裏には兎もすると賣買に類  
 するものがある。  
 學校などは賣買さるべきもので  
 無いやうに見えるが、買手があれ  
 ば何時でも賣りたがつてゐる不景  
 氣の學校がある。それには必らず  
 負債があつて、それを拂ふ外に暖  
 簾代を申受けたといふから、買  
 手は減多に無いが、併し賣物は現  
 實あるのだ。學位の賣買は今の處  
 日本では餘り聞かないが、西洋の  
 或る國にはこれが行はれ、日本の  
 留學生で之れを買つて歸つたもの  
 が無いでもない。卒業論文なども  
 料金次第でどんなものでも依頼に  
 應じて作るものがあるといはれて  
 る。  
 衆議院議員、府縣會議員の選舉  
 に投票の賣買が行はれてゐる事は  
 餘りに知れ過ぎた事實であるが、  
 投票を買ふのは取りも直さず議席  
 を買ふのである。候補者の態度は  
 と云ふと、己れ自身を賣りものと  
 して、どうぞ買つて下さいと哀願  
 してゐるのだ。貞操の賣買は決し  
 て婦女子に限らない。有精男兒が  
 金力と利害關係で向背はどうでも  
 なる。現に鐵道や取引所に關する  
 賣買事件は度々訟廷の問題となつ  
 たではないか。酒々たる黄金萬能  
 の世の中、何物か金で買ひ得ない  
 ものがあるか。商店に販ぐもの、  
 みを以つて商品と思ふ勿れ、都會  
 の人は烈寒の節に暖地に就き自分  
 の居宅よりも遙かに蕪穢の旅館に  
 窮屈を忍ぶのが常である。これな  
 どは温暖の氣候を買ふので、旅館  
 は氣候を賣り物としてゐるのだ。  
 斯様な妙な賣買はまだ擧げれば澤  
 山あるが、兎角賣品ならざる商品



秋冷の候愈御清適奉賀候扱高芙蓉先生は我邦篆刻界  
 中興の祖に有之候處本年は仙去後恰も一百五十年に  
 相當候間同志胥謀り左記の通聊祭典を執行可致こと  
 に相成候就ては御清閑も在らせられ候は、御來臨被  
 成下度此段御案内申上候敬具

昭和八年十一月二十日

發起人

追啓御珍藏の本邦人刻印又は印籍類を當日御出陳被下候は、幸に  
 存候品目は前以て御一報願上候

記

- 一、場 處 麴町區紀尾井町清水谷公園内皆香園(市電赤坂見附下車)
- 二、日 時 十一月二十六日(日曜)
- 三、祭 典 午前十時執行
- 四、展 觀 芙蓉先生並に本邦印人の遺作品
- 五、餘 興 有志者の席上篆刻、樂燒



發起人

贊	襄	市	徳	萩	河	足	菊	三
島	富	野	井	達	池	村	興	
春	蘇	淡	荃	疇	惺	竹		
城	峯	齋	廬	邨	堂	清		

郡	石	服	山	高	新	岡	新	岡	關	福	君	飯	中	安	山	岡	岡	内
司	井	部	崎	本	畑	井	部	間	野	塚	村	田	仲	村	田	村	藤	本
之			廣	之	持					芳	松	正	恒	重				
教	碩	要	之	寬	隆	琳	寬	歡	宰	英	壽	辰	秋	廣	平	男	泰	夫
所	梅	石	大	寸	翠	琢	香	靜	香	鳳	天	秀	蘭	香	正	梅	枕	香
	石	石	華	草	石	齋	塙	邨	雲	江	心	處	臺	雨	平	坨	書	石







人の書いれよく字も集めあふかゝる間用は他がせ、  
この書に漏れぬことも書きつく、古の人の今も半根  
の字も題して即座に流況せしめ、教の如き  
絶筆に扱われ手拭と炬燵も今に説かれ  
心だか、この七文類びて

十一日示す

○書き其書と池大雅の友人むちあつせに印を刷し  
自分いよくも補ふす、大雅の自分其書に印を  
し印を刷しぬりてあつせと思つたればかゝる  
其書書の遺刻と傳ふす、とて、無名の印七文  
何れ別せんか、今衆のほむ、無名の印七文  
其の下用、主つものむ、予の書物一馬の印  
外二款の其書書の心、穿ち傳つてあるを、

書

あつた。大雅の早くから母を慕ふや、画と書き  
不印も刷しぬりて傳ふす、から、高き人其書と京  
都に出る、前二印を刷つた、かゝる、其書  
其書と人、此の心、其書が京都へ入つて  
から互い、其書とあり、今、此の心、或  
其書が、印つて、其書、其書の、其書の、  
ハ、其書の、其書の、其書の、其書の、  
め、其書の、其書の、其書の、其書の、  
の、其書の、其書の、其書の、其書の、  
其書の、其書の、其書の、其書の、  
○其書の、其書の、其書の、其書の、  
朝、其書の、其書の、其書の、其書の、



今の世の人の門を植樹をふさぎいきかゝる  
紫陽の花

とらさくさめり

○昨夜夕子に眼が是れ枕頭の一書と読劇し天の  
山々を獲て後には其書は西馬南分の山若  
馬麻一兩人の書つれ。西馬の思ふに長るまじい才者  
と有しと云つては、此魚川の郷里に在りて、常々  
四の材料に書を著しをみる。良書の事蹟を類  
物しり子比人の力である。今方の著者郷田の材料  
七百人の馬鹿に選んじ所は興味がある。まづは女  
人物の書に仰るのよむ所は自分も著きつけた。  
誰んが學ぶ人偉い人、筆を著けしが特馬鹿

を思入れば所は方の書に著る眼がある。田舎の草深い家  
の眼一丁家の真いよ、暗思ふよ、呆痴のよか少  
くくすい。此等、仰空の翔馬の的とすて、相手をさ  
んるのよかある。今方、文人の筆下は、さくさく  
いよか、さくさくさくさくさくさく、呆痴のよか、  
七あり、常徑を外れば、行かざる、権つ、馬と大腹さ  
かあり、大腹がある、さくさくさくさく、無智のよか、  
天真爛漫の、善天氏の民の如く元始的、家畜に比するハ  
一段意味の、勿論五体の不具のよかある。此等のよか  
よか、この村流もあつて、店屋もあつて、自然人の  
懐んぬもあつて、較し方せがして食に困らるゝのよかあ  
る。村流の固業、さくさくさくさく、此の族が談柄とすゝ笑

よる。悠哲の茶のみばうし、梅庵の若ぶらうの此等の淡  
柳柄が多く、身も似て受けが、一概に曇り難い趣も  
ある。此等馬鹿の若者も此等の事實を少くも他を  
書き留めれば、心ちの受けが、こも書き留め  
れば、柳手も梅手姿をぬれ、相手も思を淡くし、  
このことすらあるから、怪談も此等の人間の  
突っ込みから、えらうに優るも云へる。況して此等の  
族の行動も、序へ用やうも、**④** 女の友面を敷  
世の舌味もある。一世利巧ぶつ、の風をうけて、今の  
馬鹿も、題目とするの、随筆、ハ、随筆の、宛表も、おの  
から、取らう、だが、まを、家、骨、ま、おの、宛、ま、取、か  
ある。若深い、人、名、ま、落、こ、お、し、め、る、野、生、の、材、料、を

書影

拾い上げて、磨きもかけ、高き若者、ある、文才を見る。一般  
の人、更、ま、靴着、カ、い、馬鹿、痴漢、の、淡、柳、の、取、り  
上げ、も、え、ん、ハ、一、部、お、も、い、書、を、う、り、ま、こ、も、お、出、来、る、他、  
田舎、ま、敷、ら、い、の、お、も、い、書、も、唯、ま、う、り、ま、こ、も、野、生、の、材、料、  
え、ら、う、ま、ま、く、採、り、ま、こ、も、い、か、あ、る、か、い、ん、ま、い、。日、年  
各地、の、郷、土、史、料、も、寄、り、集、め、る、こ、も、お、行、の、ん、と、お、る、こ、も  
い、い、こ、も、お、い、こ、い、の、上、品、の、採、集、も、お、集、め、る、か、田、舎、の、遊、人  
い、お、る、大、切、い、面、白、味、の、お、も、い、書、も、下、手、の、方、も、あ、る、  
乃、ち、農、村、の、傳、説、や、慣、習、や、碑、文、傳、説、の、お、も、い、書、も、あ、る、  
ハ、傳、説、の、お、も、い、書、も、あ、る、**⑤** 又、お、も、い、書、も、あ、る、  
お、も、い、書、も、あ、る、**⑥** 又、お、も、い、書、も、あ、る、  
ハ、此、の、下、手、の、お、も、い、書、も、あ、る、**⑦** 又、お、も、い、書、も、あ、る、



あまの堰より出た物に少くも

○比三十四の文の勘合をうへにカゴの甘果持たては、既に  
い物類に東京科子地物被本秋保あ次氏の視察法を以  
てた。流石に並米利加の主信ゆけちりも、いふも大視摸のよみか  
程未保のやうとさういふ建案もたに、あが因にをさしとある  
形式もあつたか、レカゴの口金に程未の形式を破つた、形  
た多し、他のあつたか、とさういふ。又のまつての、點を奉  
けること七事があつたとさういふも、出米のこと思ふに、未一開成式  
も、いふ、いふ、都な、この、四、後、の、やう、いふ、こと、が、あつた、の、か  
珍しく、いふ、か、と、いふ、二、日、後、上、け、た、と、さう、いふ、開成式、坊、二、軍、  
隊、が、使、入、り、込、入、り、の、合、本、と、記、し、し、棒、鏡、を、經、と、取、り、ま、の、  
了、る、一、時、も、七、日、費、し、た、の、か、平、和、を、ま、た、い、ふ、も、情、勢、の、か、







世の事の跡めをえこし山ふもゆるなることまぢまぢけり

迹懐

ともかき世の巨まじりともむらさき信七葉まかたき

鳩

玉子を運ばし一のことありて鳩の羽おひ世にけり

羊

毛をあらわじかひめのかはんとあるか羊の脚軒ける

解す

破岸の蟹の揚穴差くし海人がきり目いんせり

杖

まゝ人がこすの黄金の杖を人の土にけつあぬ七のんをける

瀬



徒海人の運るいんをさき早瀬の迹の目もとま

海上月

難とて船路の行くて書のごと大己のはらぬ月照り

基名

うちさしとせむ世にほむしはどごの同者の殻の埋む火桶に



就ての前記に依りては、こゝに略するが、日本女性の服  
装は、奥座敷の家は、美加流の、長襦袢と袴  
の、解衣の時、けんが露いん、よみあ  
この、縁、の、あ、海、え、ん、か、ね、あ、ん、の、

外装の、女、の、美、の、事、を、と、事、め、ら、し、て、西、洋  
人、の、目、を、惹、き、つ、け、る、外、装、の、事、を、主、と、し、て、美  
を、主、と、し、る、の、上、着、を、脱、し、て、長、襦、袢、を、帯、を、と、め、  
に、姿、を、喝、采、と、し、て、ま、つ、て、あ、る、か、莫、か、け、れ、こ、と、  
一、笑、を、禁、し、得、ま、い、。

○中央の、海、の、ゆ、を、集、め、約、結、し、て、遊、び、の、世、を、時  
を、接、助、者、と、し、て、人、を、お、も、つ、た、恩、の、令、を、と、し、て、未、だ、  
に、用、し、て、自、己、の、臨、席、に、た、福、の、部、部、の、約、九、九、が、遊  
し、割、を、継、續、し、解、後、者、が、多、い、と、ま、つ、て、日、社、を、換  
ま、か、さ、し、と、ま、つ、て、お、い、の、世、の、約、十、十、以上、の、あ、つ、れ  
ら、い、か、遊、び、を、述、べ、れ、各、方、面、の、人、々、を、拾、う、り、人、々、と、  
こ、と、く、三、萬、位、が、結、び、あ、つ、と、思、つ、て、ま、つ、て、三、信、と





生田の初馬屋と云い後入園者と改め終馬  
と改めしと云う

日頃男也奥平福輔。惜い子時ねをわくも推し  
庶政更始の犠牲なるも刑死した。自今、切年時福  
輔と云ふの縁がなほあるを、事の新入に聞するも  
を、男同きとき、えを扱ふ一重くことか例と  
らうてゐる。獄中の福輔に就てうぬていふは、  
此ことか、奥平の山重法也。  
云ふ人の考いれよかぬめと云ふ。奥平の條りよ  
よんし、自今、わくも、押活も文つてゐるから、こ  
こ、わたりぬことぬあて他、の春も、つた、つた

後の一誠とは五に心から相許した仲であつた。

萩の亂が鎮定し彼が捕はれて獄中にあつた頃、松陰門の塾友  
品川彌二郎が内務大臣書記官として巡視にやつて來た。

『お、彌二郎か、よく來たな、僕の地獄行も近いが、松陰先生か  
らお前の事を聞かれたら何と言つたものだらう？』

『ご覽の通りだ、よろしくたのむよ』

品川はさり氣なくからりと笑つて答へた。  
一誠と謙輔に縣令關口は心から温かい同情を投げかけてゐた  
ので牢内を訪ねる度毎に、彼は樽詰の酒をふたりに贈ることを  
忘れなかつた。一誠は生れつき無口だつたが、謙輔は時と場所を  
問はず談論を風發さす男だつた。日頃から政府の地租改正を失  
政に數へてやまぬ彼は、縣令の顔を見ると猛烈にまくし立てた。  
『政府の税制は全くなつとらん、僕はいろ／＼和漢の典故を調  
べたが、未だ曾てこんな悪法を見聞したことがない、即時改  
廢すべきだ』

答へぬ縣令に彼はふと氣をかえて、新らしい注文を切りした。

『時に關口君、僕は牢入りをしてからこゝ五六日稗をのまん  
で、どうにも我慢がならないんだ、何とか考へてくれんか』

隆吉はやはり無言の儘、ポケットから眞を取出しそれに火を點  
けて牢の格子越しに手渡ししてくれた。

『や、ありがたう』

さもうまさうにスバ／＼やつてゐる謙輔に、彼は卒然と訊いた

『奥平君、きみは吉原へ行つたことがあるかい？』

『そりや、あるさ』

『どこの青樓でも尤物が張見世をしてゐるだらう？ ぞめき客  
が近寄ると例の朱羅子の長煙管で吸付け眞を脩めるのが一般  
の慣はしさ、ところがこゝではあべこべに格子の中にある  
君に、僕が外から吸付け眞をのませてゐる。君の税制論もこ  
れと同じことだ、天下の事は必ずしも一律に論じられない  
よ』

『こいつはやられた』

隆吉はにつこりした、謙輔は横手を打つた、一誠等までがどつ  
と笑ひ崩れた。

牢内で判事を賞める

或る夜謙輔は強か酒に酔つたまぎれに同囚と喧嘩をした。こ  
れを聞いたのか關口の顔が疎くなつた、それよりも好きなおし

生田の初馬屋とらひ後入園者と改め終焉

きせの贈りものを縣令から断れてはことだつた、判事岩村通俊から喧嘩一件の呼出しがきた、訊問が済むとぬかりなく謙輔は注文をつけた。

『もう牢内で喧嘩をせんから、例の酒をこれまで通りお願ひじたいと、君から一つ縣令に詫びてくれないか』  
『たわけたことをいふな、囚人に酒をくれる縣令があつてたまるか』

通俊に一喝されて謙輔もばつが悪くその儘牢にかへつた。判事はすぐ縣令を訪ねて(氣の毒だからまた牢へ酒を入れてやつてくれ)と頼んだ。其夜牢内には思ひもかけず酒が贈られた、縣令は再び格子外に立つて謙輔に聲をかけた。

『さうさ、君達に酒をのませるのは私人隆吉の情誼に過ぎない、判事に知れては問題だよ』

『つい口走つてしまつたんだ、だが岩村といふやつは相當なものだ、山口縣にもあんなしつかりした判事があるとは心強さ』

『當世は君達が考へてゐる以上に進んでゐる、優れた官吏も決して少くはない、その中でもあれなどは鍾々たるもんだよ』

牢の内と外で互に判事を賞め合ふたりだつた。

刑死までの謙輔

奥平は母に遺書をかきたいと縣令に願ひ出た、新らしい筆と硯が與へられた。手紙は平假名ばかりの行列だつたが末尾になるといきなり『縣令關口能く兒を看る』と書いた、それにちつと目を止めた隆吉は『失敬だが君のお母さんは漢文を讀めるのかい』と質ねた、讀めるものか、つい筆が走つてしまつたんだよ』と相手は首を振つた。

縣令の効はりに肚の底から感謝してゐた謙輔だが、牢内ではそして死罪と決つてゐる彼には、どうにもそれを示す方法が無かつた。

『君、詩作はこの頃どうだ、一つ聞かせないか』

『お世話になりばなしで死に就くのがちと心残りだ。たしか舊友落合のところ七律を三十首ばかり書いた僕の舊稿がある筈だ、せめてそれでも取寄せて讀んで貰ふより仕方がないと思つてゐる』

ふたりはこんな話のやりとりもした。

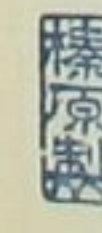
遂に刑の執行日が來た。縣令關口は牢を訪ねてしみる謙輔

○日本の酒類は、風味を感ずる自から香気心、手  
を下し成りしに、この多くはバルサリック、リネア、  
を度で感ずる。リネアは日本、アムニ、日本、  
あ、この日本、多くの友人も、あ、日本、  
一、この日本、酒類の、心、  
だ、十年前、は、この、娘、  
ら、一二、の、心、を、手、入、  
日本、未、  
輸、送、  
十年、前、  
本、味、  
つ、所、  
の、特、

がある。大木四、五思ひ切つた雄大の畫を彫刻し、その  
とを又ると、頭を下げざるを得る。●其物の形は  
前々より飽きむ日本式である。●其の辰辰の浦入の  
此の形は持斎一箇を踏んだ。勅も授けりも  
一程の滋味がある。十年前の公卿を思ふ名がある  
の比が、今方の二の洋字の印が又くる。十二月四日。

○天行抄平席園古稀を達して、同人天行の詩文五首を刻  
す、天行文は、古し詩も亦拙く、法臺の詩を在社曉  
り、今に至るまで、文法武十年、事ある毎、妙人の文を  
評ふ、其甚深か。今の漸やく、謝を得て、詩鈔を関し、左  
に録する、其持、予の心、合する、什也、友人の心、其持、其の  
情味の棟まへ、其あると、其の

十二月五日



偶成

無物不出淡、山中宜養真、白雪如の袖、持燈  
長中人

将下山賦一絶

暫心洞天客、心身雲外閑、仙縁一何淺、向日  
福人間

寄考酒

邱壑雖云樂、離群悔亦莫、山中一杯酒、思  
典故人何

前山欲雨

山雨欲来前、微花無素道、峰々自吐雲、翠向雲  
中隱

古長

路逢胡人逢，呼之欲相逐，驅車如疾風，滾滾揚塵去。

過入陸橋

雲路一橋架，仙凡徑是通，食茶塵世塊，看水石

初夏

於物無凝滯，洞看可房後，蒼兔難一可，惜運奇

題畫

野色蕭條晚秋，斜陽一箇歸牛，古帘影外山



楊家橋所見

林靜夕啼鳥，衡茅八九家，寒村生暮色，春色在梅花。

從黃岩湖

湖色如鏡時，涵鏡翠宇翠，待君休動棹，恐破日色中山。

川前

川前蒼可羅，狹巷不容靴，未佳五六人，中有天下士。

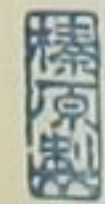
奉兒

三十為人父，起下弄璋珠，祖色存血脈，不笑問賢愚。

申亥元旦

自呼古物破天荒、在魂心胸錦補腸、四十九年猶  
未忘乾坤待我大文章。

○自合の玩具や小骨董も蒐集しあつたことをやまき  
知り、小蛙と十数個持込人にもあがある。佳ゆきのぬ  
事家が寄せ集められたり、さういふ時代はあつ  
骨董として確々中以上のものもある、頗る大形は細  
尖で右滴とさつてあつたものもある、備前備七あり、木彫  
七あり、燕てえんいあつたものもある。此れ中ま  
番凡のものはあつて、骨董は是れよりあつたもの  
を別紙去つて、自合ハ點睛ハ入る、小骨董集七は来



病めであるの、いんをるの流石に合坊動き、亦  
無用のも長物を購ひ入る

十二月五日

○自合の新聞地蔵の産生かを註の東京日々こある  
ん地併し、本は是つてこある。自分沙のあり、本  
が電も名を、轉渡しあつたものもある、おとれのをあつた、  
自分の従来の、地蔵七、八種の、早大出版部  
へあつたもの、今春、地蔵のあり、任じられた中  
央公論社へあつたもの、とさういふ、んまの、各冊に  
捺印を捺すことも、さういふ、捺印を捺  
すこと、初めは、任職である。二三日、前年の降、二  
中公論社へあつたもの、二冊、捺印を世に、やつて  
未だ、可き、代、火鉢を、出、葉子や茶



篇三.藻文る盛を味醐醒の然自と

星巨の界筆隨るたれ隨

著城春島市

春城代酔録

●題目・老境・外人に日本の女将を語る・農村精華・  
 福の種々相・石を語る・諸侯の本朝道楽・たばこ・  
 させる・山道楽・酒道楽・徳川氏に對する・桑山子(外七篇)  
 ●著者・徳川氏・徳川氏の著書は如何に取扱はれ  
 たか・古本屋・藏書印の考察・明季種彦の手紙・イ  
 シキ・陳列(外十篇)  
 ●著者・板垣信・早亭氏・大森木曾・遊學子・野口幸世  
 ●博士・中野武蔵氏・古河市兵衛翁・安田清次郎翁・田口  
 卯吉氏・朝吹英二氏・岩崎彌太郎氏・坪内逍遙翁・田口  
 山陽の遺子(外五篇)  
 ●贊助百談・西園寺侯・東條琴喜・日本は幸の國・關東  
 州の地境・米國の禁酒觀察・露華の妾・西郷の大尺  
 八・女子と美術・信書の秘密・實業の藝術・嚴座の脚  
 世之助と執れ・第九笑話・野合(外九十篇)  
 ●吹塵録(附録)

硬軟、清濁、酒、女の  
 全體験を傾き盡せる仙  
 骨の艶姿!! 愉絶酒  
 脱な昭和徒然草!!

定價 一圓八十錢  
 送料 十四錢  
 四六判 六百頁  
 函入 樂業地裝



ちよもを物してやうな。立千部、の検印を捺す。此の  
 一つの検印は、一人の手ぬき、半間先ん、分々二つ  
 の検印を提出し、此の供養の女工の検印は、よ  
 トリく押した。此の一時、手紙を、あつて、金部、海  
 の、この、九、を、押、す、と、う、な、ハ、こ、の、一、〇、ト、仕、事  
 である。個、検、ま、こ、と、ま、少、供、を、使、使、得、す、の、七、一、葉  
 である。と、い、ふ、の、れ。

日、抄、年、天、行、係、枕、の、士、選、奉、坊、禮、東、漢、壇、に、ま、つ  
 を、あ、り、と、す、大、深、差、識、念、を、解、散、し、選、卷、と、行  
 お、日、君、余、の、御、名、被、授、と、淋、源、一、余、の、加、物、金、部、こ  
 たり、君、と、ま、ま、深、し、令、一、又、字、を、法、る、天、金、上  
 の、化、二、三、を、示、さ、る、邪、堂、行、長、身、身、一、也、此、詩、詩



位恭とよかありて、此人の自合の言定が、其冬日又轉しかつて、  
この中、天行の終地姓を継い此人がある。今次文劔を獲  
み天行の先考の行状が、疾めをあるもの、始め先考が  
幕末顯密の地住ありて、人等を知り得比、乃ち其の  
大略を記す。大久保忠愍、通稱主膳正、權軒と號し、此  
世の徳川氏に仕く、壬午石を合み、天保四年八月生、林  
權守を師とし、早く西洋の兵法を修め、火器に精を精  
しかつて、自以壬午年封を授け、安命を列し、文久日  
元年三月、岩倉所欽取とあり、日守七日付、轉じ、十  
月、神奈川を去り、東福寺の叢に寓し、折衝  
又任し、切あり、二年六月、從士位下、叙され、其後  
守に任し、長崎を治り、其時、外人倭傲不遜、進



々難題を提題し、鏡を以て威嚇す、君神名自是  
論じ、其理を以てす、外人志沮、君のつ下、此  
勇士方、字三と出す、君士卒を訓練し、西洋兵器  
を初め、用由、亦告あり、在り、西洋醫術を奨励す  
杉本良順、戸塚文海、皆才を君に仰て、回手とあり  
り、又内田春樹、一下、尾連城を、外人に就て、言  
を、術を習ひしむ、  
君は、長州征伐の時、京都町奉行たり、後、游撃隊長  
に轉し、明治元年、徳川公奉勅入勤の時、會津二藩  
の兵に、君は、甲府行を以て、二大隊の歩兵を率へ  
て、先考、鳥羽の淵を、先考、先考を傷く、後、君  
が、君、鳥羽の淵、先考、先考を傷く、後、君  
が、君、鳥羽の淵、先考、先考を傷く、後、君



十二月七日記

名多の両條の抗敵納めあり。  
○中川行秀の編みこころ、世刊武藏國金石年表に  
七條あり一説も、年表に載りし所の金石八百數十  
を數ふ、此内より、江家秘府のものあり、所在不明のもの  
七あり、其内の切んせりものあり、亡失のものあり、これ等  
を合し七十に滿ず、案の如く、約い少く、慶長十九年  
以後の採りしものあり、現に武藏に存するもの  
は、安永前後の八九十年前後のものあり、其前のもの  
は、少く。回鑿とありしものあり、木造佛十六、銅造佛  
六、梵鐘四、大刀廿二、石幢二、木版三十五、又、造りしもの  
とを記す。



又此いし思ふよかあり。京都に獲れ、近代に有職  
の服飾も唐物に似つれしものあり、(お多)といふが、委し  
ことがいふ多し。二王天の体制も佛具、就し物  
らありたりしものあり。志か、此等も土の証あり、國  
土の家系も無いのが、早大國書院に依頼し  
若干の考査を得たり、近代の日本製の圓鏡  
ハ未だ見もつるものあり。二王天の体制は、初めは、考  
査を遂げ、其解りたるが、自分の得たる二王天の時  
代が表か、刻の法、合つてあるやうに思ふ、  
其、其國の築山子の持幅、其の閱歴を記し  
ルと思ひ、其の七條を得たり。

魚袋

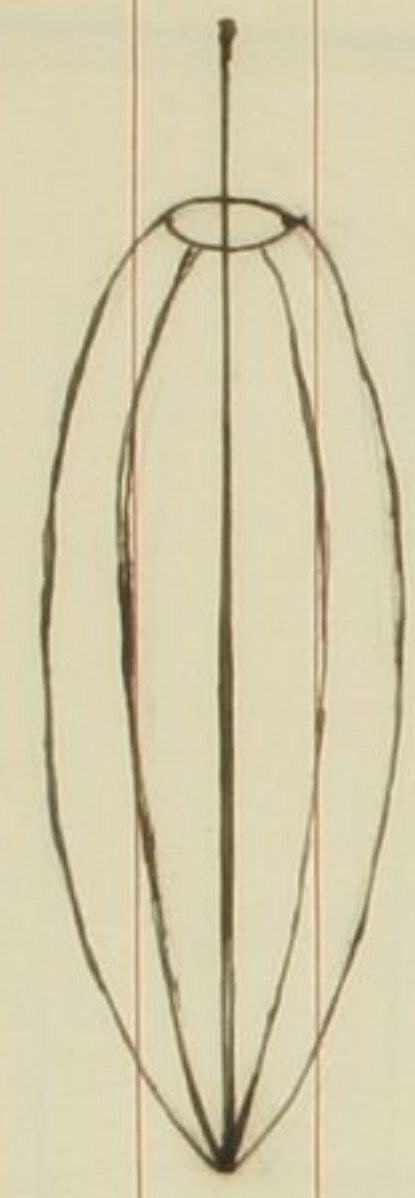
大學衍義補 卷十 禮 明 魚袋之制始於唐蓋用以為符契也其始曰魚符左一右一左者進內右者隨身刻官銜姓名出入合之因盛以衣故以魚袋名焉宋因之其制以金銀飾為魚形公服則繫於帶而垂於後以明貴賤蓋無復如唐之符契者矣攷朝革去前代魚袋云云

事物紀原 三 寶鏡曰三代以韋為之謂之韋袋魏易之為龜唐高祖給隨身魚三品以上其飾金五品以上其飾銀故名魚袋天后改為龜後復曰魚神龍初賜紫則給金魚賜緋則給銀魚不限品也唐會要曰永徽二年四月二十九日給隨身魚袋咸亨二年五月三日始令京官四品五品職事佩銀魚之視元年十月十三日職事三品以上用金銖四品銀五品銀景雲二年四月二十四日故文魚袋著紫者金裝緋者銀裝宋朝神

宗元豐末親王又賜玉魚 以金帶金魚以玉帶以唐禮也 韓文公之詩曰不知官高卑玉帶懸金魚是也



金魚袋



村田春海織錦金隨筆 下云  
寬政四年壬子五月七日二島自寬とともに住吉の記方へ行て賢聖障子を拜見す此度御吟味に付土佐將監方に杜如晦房玄齡馬周の三圖巨勢金函の圖ありて

獻上す此三つは此度右の圖のまゝに寫せしより其餘は此度新に圖を制してといへり土如晦金魚袋を佩ふたちして四角にて紐なかくさかれり房玄齡は六角の金魚袋を佩ぶ是は紐をみじかくしてつけたり六角は右の如く上下ほそりて今京にて兒童のもてあそぶがりに

昭利 年 月 日 日の形の如し二つとも紋なし烏金泥にてぬれり

二王天

大日經<sup>ニ</sup>曰ク 明門<sup>ニ</sup>守護<sup>アリ</sup> 不可越<sup>ト</sup>相向<sup>ト</sup> 擬手<sup>ヲ</sup>而上<sup>テ</sup>指<sup>テ</sup> 朱目<sup>ヲ</sup>奮怒<sup>シ</sup>形<sup>ノ</sup>

經軌には不可越は左手を開いて頭の邊に擧げ右手は金剛拳にして頭指を立て胸の前に置く是れ獨股の印なり相向は左手肘拳にして高く擧げて物を打つ勢をなすとあれども今の仁王尊は赤色にして右邊の尊左手を擧げ右手獨股を持ち左尊邊の右手を擧げて物を打つ勢をなす

右 不可越守護 口を開く 智徳男性 吽

左 相向守護 口を開く 理徳女性 阿

之を或は密跡金剛、密跡力士、又執金剛神、那羅延金剛ともい



千景

四王、四天王、四大天王 <sup>キ</sup>

四方ヲ守護<sup>ス</sup>元天ナリ

持國<sup>東</sup> 增長<sup>南</sup> 廣目<sup>西</sup> 毘沙門<sup>北</sup>

金光明經ニ之ヲ説ク國方寺ニ金光四天王護國之寺ノ稱アリ

千景<sup>ニ</sup>三景<sup>ノ</sup>

名之之字子玄通稱汝左衛門、江戸ノ人、初メ秋山玉山ニ

編みじ後、沮徠ノ説ヲ奉ス、古河侯ノ侍讀トナリ、致仕ノ後駒込

ニ教授ス、其著ニ莊子荀子國語家語ノ釋註及官職通解、

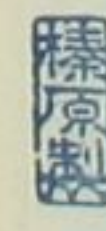
唐詩掌故、芸閣文集、頌悟詩傳、作文小成等アリ、寛政

四年十一月七日卒ス、年六十六





の目録あり、この書の上の大書の火災を免れし  
ハ仕人と云ふべし、唯此書紅毛七徳集の八  
徳本の減ひたるは惜らむ、紅毛家海の道雲の  
最も苦心し、この書も是に得、細井彦作  
の序あり、版下と云ふ、故下等書も書きたる福本也  
道雲、政徳二世の好榮軒、最刻の志あり、珠  
篆文と篆者字引と改題と出、世に行  
ひ、池水家の存本も、榮栗山自筆の跋あり、  
り、阿彌陀縁起ハ其、鑿獨湛の所心、處の三文  
本も是と云ふ、あるの開光の偈あり、其の千  
果の縁起をぬき、浮漢文と一巻をなす、列  
道雲の跋あり、縁起一巻あり、道雲自筆



多し、繪の狩野梅春も、此阿彌陀佛と池水氏二  
代の時、或る旅僧の齋とて七徳けあり、この  
書の、この火磨の火災也、又大正十二年の火災をも免  
れん、この書も、道雲の遺言也、此今も由延綿密  
の、この書も、家海、道雲、二人のまじり、徳ハ一  
の、この書も、并、秋天、二十、七、分、評の、伽、覧、と、七、徳、刊  
し、この書も、背、面、に、葵、葉、あり、徳座に、目、録、あり、  
あり、徳厨子も、あり、美、入、あり、徳ん、家、康、が、井、伊、  
と、並、つ、つ、あり、徳直、春、の、孫、と、道、雲、交、あり、徳道、  
中、瑞、氣、の、瑞、行、研、も、井、伊、の、記、あり、徳其、是、徳、  
と、題、あり、徳この書も、徳め、あり、徳同、あり、徳井、伊、家  
の、後、本、あり、



年細井廣作最體：序す

曰七年、廣作、石刻三休千字文、題と字す

曰八年、廣作、文字變珠、序す

天文二年、細井廣作、一刀萬象、後集(三冊)、序す、曰年

此尾、後集、序す、曰二年、成島鳳卿、本公法

序、以引七、序す

以上、專ら、序、跋の年月、又、概り、心り、年譜、うも、三四、略し、た、ま、あ、  
氏、三、前、一、刀、萬、象、か、中、時、世、を、示、せ、ん、を、執、を、記、す、べ、し、也、也、  
と、廣、作、の、交、り、の、淺、か、う、る、を、記、す、べ、し、也、也、道、空、の、家、系、ハ、何、人、  
ハ、受、け、や、未、だ、文、献、ニ、あ、ら、ず、を、得、る、ハ、後、裔、ニ、才、も、知、ら、ず、  
か、ま、い、或、ハ、考、索、便、ち、あ、り、獨、立、考、証、心、成、る、時、の、ゆ、え、に、と、  
交、り、も、あ、ら、ず、形、跡、も、あ、ら、ず、此、考、の、人、の、内、ニ、家、系、の、ゆ、え、に、



あり、人、あ、ら、ず、と、考、索、せ、し、也、也、此、點、ハ、為、は、房、あ、ら、ず、也、也、

道空の墓碑ハ、七と、淡島田原町誓願寺地中ニ、あり、

一ハ、大正十二年、関東大震災、大の、為、の、土、地、区、画、變、更、

理、の、結、果、誓、願、寺、湯、島、院、長、安、院、と、合、さ、り、他、の、十、

一、寺、ハ、練、馬、河、谷、戸、山、ノ、墓、地、と、共、ニ、福、壽、寺、と、し、て、決、

し、池、亦、家、を、買、ひ、三、年、七、月、十、日、練、馬、受、用、院、と、

地、ハ、改、葬、一、せ、し、と、す、

道空、ハ、あ、ら、ず、の、死、終、を、切、り、親、族、を、合、し、又、ハ、三、受、持、

の、子、家、以、此、地、を、自、ら、買、ひ、決、お、し、し、と、家、ハ、傳、へ、

其、の、心、意、ハ、大、空、無、の、ゆ、え、に、い、ん、と、其、の、字、を、い、は、す、

リ、一、説、し、湯、島、院、ハ、其、ノ、海、傍、に、常、住、の、著、し、此、の、

畫、傍、の、字、ハ、七、を、え、し、法、体、の、道、空、院、と、改、葬、を、願、す、也、







所を交けんやか熟知の本誓寺漸ゆく新瘻し其の修繕日  
困り大境内の志村を賣つて修繕の資を乞ふ人あり。況ん三千  
飯の不足即し其の命も買主未だ伐採せざるを幸とし買  
ひ戻す者あり義金を募りてありと語つる大のり及境  
概其亭之んを賣き僅くも存する意知の將きも亡び  
んとすことを思ふと一匙哀傷の念無きい能はず。四家修  
資を惜しむの時をうらみ、若千の資を投じて其の義  
奉を助む。月ある世の移り変らば自然の御机  
と人力のあつとも難きことあるも文化の樹木に福す  
ことの甚しきも。身親視す可く其の交遊をつらく為  
る。其の道に携りて樹木に伐採せらる。山を削りて為  
るも樹木に土と共に失はる。殊に文化のこゝろ大和とせ



の久字の印刷のほの紙の和紙造の美大森林に及るく世の  
存在を失ひつゝあり、文化の樹木に福する亦有しと謂  
はざるを得ず。日本に樹木の多きを以つて世界を誇るの由  
とあるのん。今日の如く樹木を濫伐し行かば日本も或  
い潤ひらき立土とす。今日の日本も或るべき。樹木  
角爪鼓と紅橋といふまじや。連夜之士は、  
凡て樹木を心して保つて計無のり。一方樹木のこゝろ  
くを見ん。せん。代りの樹木の栽培に力を改む。故に  
四の進土と日本も其の時をうらみ。偶々感する  
不ありて漫る。所憶を志す。 十二月十日。

○此頃池水遺るの遺者を見て思ひ出たこと。二三年前村  
口書名、多く遺者を見て此ことがあつた。あつた。どこから出たか。





いふと思ひき、面目がある

北条の最盛の歴史より必ののよみあるが印譜を  
黄重のよみよりつくぬいつまむし受んるのり印譜を  
まの

○身も自分の考案に帰し北条おんの大帳面の天保の子年  
らと六年より三十七年の記述を約三万枚とある大  
州本より大改の考案山内の書留む校印日記の標記が  
北家の多数の印木を不ぬしめたと見ても谷田書留  
から印譜をこゝに托し北条書留に就て宛の帳面  
書せし方

月 十 采外傳 十五部 河大  
日 和漢活法 十五部 河大

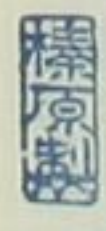


玉屑 三十部 河大

北条の浮山の考案に見へておる。京都より考案や江戸  
の考案から伝来しれり。印摺り事類考の録り多  
くまの極めを辨んるにちりつと見あはれり。五十部  
程にわかれあり。又二部と見ゆれり。印刷を教人れこ  
とにたんの、常行の漢字流行の折柄は後赤點五部が  
著しく、まの北条の考案あり。三万部あり。まの  
皆北条の冬去る。左のまの千形を以て伝来す  
が例あり。北條面の中より四五千形が挿入してある。

文書考のりん 五十部 河大  
左以千形考摺り 五十部 河大  
山内 河大

手形は式に依りてありてある。故にこれと認めしむ。摺り紙千  
の枚賃を取ればと見くらむが、此帳面なる枚賃が細くともい  
大分大帳であつて、別な帳面があるから、思ひゆる。故に  
唯此摺り紙を以て本帳と見做す。此帳面は、  
ていど多いが、大分出取の者物に、同年の出取の  
多く異なるものがある。思ひく、物名をいれ  
しく思ひゆる。江戸にハ入銀とある。取えり部を  
とかあるが、枚賃の種も、六摺りだけを取ること  
もある。いんが、京改の異名。家もある。此帳面、改  
どの者物、枚木がある。これを、  
〇々(十二月十七日)園、出取中の田中光顯の  
訪問とある。伯、此帳面、二冊の



の禮を云い、自然法、例、  
が根津嘉一、一方は伯、蘇、  
流をす、伯、其の行、  
や、  
ん、  
加、  
動、  
一、  
ん、  
内、  
執、  
時、



大臣其の魚鱗を知らずうづつに云ひ正しくの法帝  
の遺訓を犯し存りたりと云ひ得ることむかひあらず  
軒卒ふ常むある。若し今帝は皇子帝出生とす  
ハ典範に依り御名中の御即位を為すとす。猶更か  
まひも恨らざる。そこへ血統を乱す妃の日の嫁  
き、を諫止しうづつに女中も手落ちあつて田  
中伯の御法納のあつた先には、御法大皇帝の御をえん  
ことを傷くと一考を促し以て物に終つて元留りふ  
ら夫内大臣亦之を可とす。ゆゑも不忠の者し  
いよか、一木客ねも初め華族をいふ大板正院に  
よきまひを、不忠の言を放つて御職の授めあは  
へうら比が、自分ががと過つたのむやツト一年下を



ほど新しき事あり。内大臣は今も新職をうまんと  
してわづらひ、懐恨して語らん。自今、始めを授めぬ内  
容のことは在ることを知らん。

田中伯の法に據つて内大臣を買入の制を定めたる。  
三條太政大臣が辞任せん比時、御まう、内大臣を  
常侍輔弼が其親終む。その玉言を云ふ。御あ  
むのむ、三條公をもち、任むある。そのは徳大寺が  
内大臣とまう比が、此人をもち、輔弼の力量のあつた  
人ひらき、母もあつた。任あがまひ、内大臣は、其人  
を得まけんか。毎年の職を主とす。と云ふ。  
此年以前の田中伯の運命の内大臣の能も、秘  
書、秘さんにあつた。今、由左伯の人と云ふ。後解



本月七日又前七松文突死未訪持卷之花  
端早速直にお覧之 前月十日<sup>廿四</sup>一虫状江戸  
死脚に托し江戸台新河土忠於し向々  
上し故より此の又日海邊より有りて支那  
年来来の書とて之を套紙畧して先

瑞一統抄の古巻に儀有飲外よりやも無異  
此世降雪是祈雪海滞り何義忠の  
法日堂以無し何と係如の存大暑加  
之存石見七に居彼是大延川行教し  
多有り茶湯と新刻細見拜見吃有魂死  
神馳耳 陸奥川冬 の名も是迄思色くおあり



いふもふ解し後使印あり是新州小島  
一高より殊更、イヌウラナスカ子井ヨリ此の  
う心申懐惚何小生もし左留任存  
似木をお推し直授芳原ハ此の地城一由波  
潤おれし、殘憾少存傍何有るニ若く  
の傍教う、いふより、マハンモゴッポド長が  
い、ヨリ、お套紙差つて此かあの中年玉  
至到朱印あり授り何の或久あをお尋  
子一統抄にも写巻く、の傍教う、も新く家  
見七十日後在滋呂平路、ハ等あり、二日大文  
込あり傍是七招口頭、い傍取、下り  
何の、又、後使、し、尚、筆、大、乱、氣、宛



あるに非在中三浦村の文符と雌黄と如くはるまゝ今余  
が加中よりある此書状を御里邊にお山陽の面目を乞ひ  
好資料也、筑甲山陽一家の書簡一巻を花すまゝ、こ  
ゝ乃いさゝの文を心<sup>ま</sup>正するに似するが如也 十二月十九日  
○藤栗毛の著書一九が東海道五十三次を畫帳に  
漫書をかき狂歌を添くはるゝの古時版刻と云、今極  
め之稿を傳へ、一九の畫をかきだすと録り、其手本を  
其唯此此の漫書の由澤吉の著だだけ、各紙の畫  
皆輕妙を寫し、彩も七かくあり、今之稿を録り、  
今日之稿を稿とせしむるを、上出来り、龍井二  
帳の内一帳を出來、一二狂歌を

品三



たや流のあしうすゝ江戶を出し

不かんかあ川の如

と備る おぢり暇礼のめを兒をぬ

暇礼のあすぬ延る

只海報海とくときふをすん

云部 川支る進る一平日のくちを

七ころききんるころきぬのあすまゝかすまを

ころ川るのさころまゝ

○東政の書状の申合で、新刊の出る真任吉天流  
の面社、献本すること、が慣例で、於今今日内務  
、細をまると同じこととせむのれ、こゝの詢はるの慣例









甚多 人形 二  
 アイヌ 人形 二  
 瑞西 木彫 人形 四  
 明 黑騎馬 女婦 人 一  
 レヤム 口 人形 二  
 口レヤ 人形 三  
 キメコシ 人形 四  
 ハニワ 武人 像 二  
 ハニワ 式 撰 雛 人形 二  
 木彫 支那 人物 四人 羽生 一具  
 德 輪 換 婦 人 吹 笙 一  
 加 民 人 形 古 砂 厨 妓 二



瑞西 卷ク ラウカ 一  
 西洋 人形 十點  
 和 卷 人形 十點  
 陶 製 支那 娯 樂 人形 一 基  
 埃 及 人形 大 一  
 木 彫 對 鏡 婦 人 一  
 良 克 銅 像 一  
 木 彫 卷 公 像 非内久一 一  
 以上 六十七 點



又藤友おんまゝに時をいひて言ふもつすまゝに  
と彼んは後ろまきとさうしんが顔とぬめり  
つれ

彼んは藤友のほほ、あつても豊高のいふ高も教  
訓すゝゝの彼んは考思を煩ひてさういふも  
の、保陰のうゝに同じても彼んが創始的のあつ  
どいぬのとわつた。彼んはあつても藤友の  
選びて貴族院に列し、考思を煩ひて藤友の  
振興の選取目とさういふも、あつても藤友の  
七十三の年をさういふ力を用ひたところも証  
言する。彼んは恐ろしく思ひ残すことがあつ  
た。

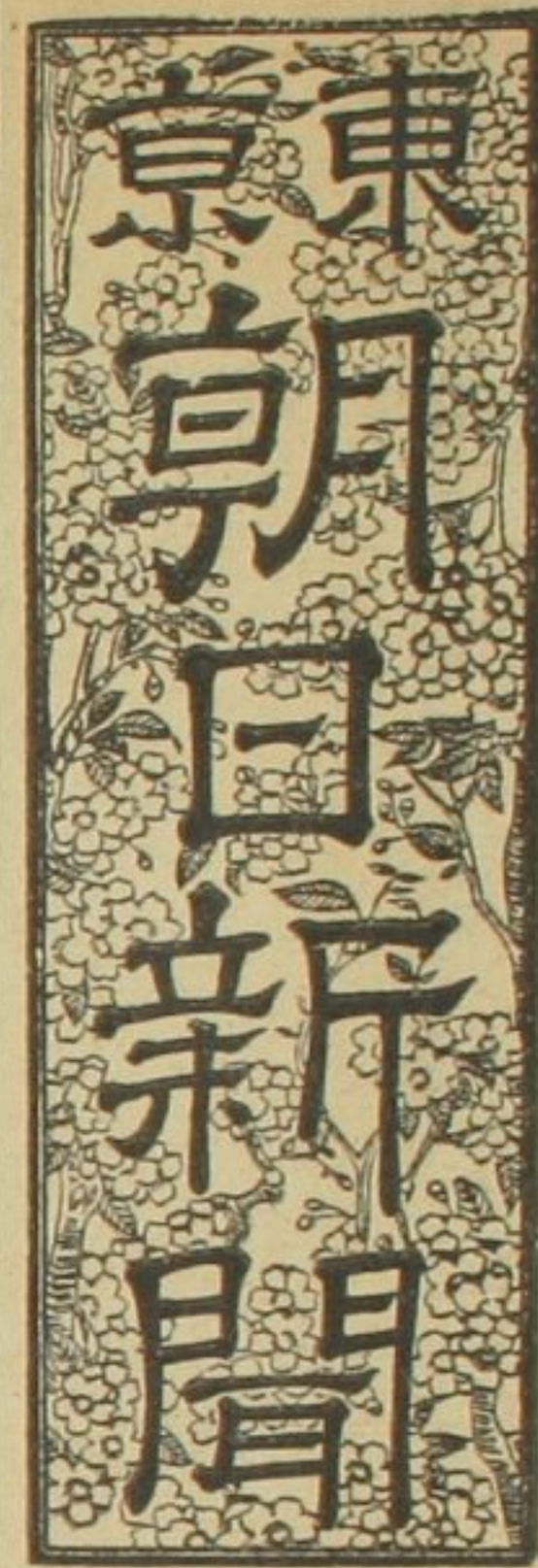
十二月廿二日



此の田中銀次士界後委長と長と妻との内  
と全との字の出入り田中正士、おん田中、考思、  
不、藤友の中、此次の考思、藤友と藤友との  
皆そつと藤友も人も



（日一十月三年五廿治明）  
可認物使郵三第



昭和八年十二月廿九日  
號外

【錄再不紙本】  
人行設刷印象編編  
則 伺 本 圖  
所 行 發  
區 町 廳 市 京 東  
地 番 三 目 丁 二 町 葉 有  
社 聞 新 日 朝 京 東

# 皇太子殿下御命名

繼宮 明仁

## 今朝御儀嚴かに勅定

皇太子殿下には御誕生以來いとも御健やかにわたらせられ、二十九日は早くも御七夜を迎へさせられた、この日宮中では嚴かな御命名の儀を執り行はせられ、御父君陛下より御名を明仁、御稱號を繼宮と親しく御命名あらせられた、午前十一時御名記を皇太子殿下に奉り諸御儀終るや同十一時五分宮内省から發表され、次で左の如く告示された

【宮内省告示第三十三號】 本月二十三日午前六時三十九分御誕生アラセラレタル親王御名ヲ明仁ト命セラレ繼宮ト稱セラル

昭和八年十二月二十九日

宮内大臣 湯淺倉平

## 宸筆の御名記を捧持

## 皇子の御側近く奉安

## 御命名の儀お滞りなく

御父君陛下が皇太子殿下に御名を賜はるめてたき御命名の儀はこの日宮中御輿において御舉行、晴れの勅使の大任を擔ふ鈴木侍從長は午前十時半小禮服に威容を正して奥宮殿伺候間に參入、天皇陛下の御旨をうけた湯淺宮相は、畏くも陛下が大高檀紙三つ折に御墨の跡も鮮やかな宸筆の御名記を、宮内大臣謹記の御稱號を勅使鈴木侍從長に授けた、御名記と御稱號は蒔繪の筥に入れ更に柳筥に納められ、それを菊花御紋章を白ぬきにした御ふくさに包まれてあり、侍從長はこれを恭しく捧持して直に皇后陛下の本宮に參進、廣幡皇后宮大夫にこれを授け、大夫は更に袿袴姿の竹屋女官長にこれを授け、女官長は恭しく捧持して皇子室に參進、午前十一時三寶にのせて皇太子殿下の御枕邊に奉安し、こゝに晴れの御儀は滞りなく終らせられた、次いで勅使鈴木侍從長は天皇陛下に御命名の儀御終了につきつばさに奏上するところあり、天機殊の外麗はしく拜されたを承る

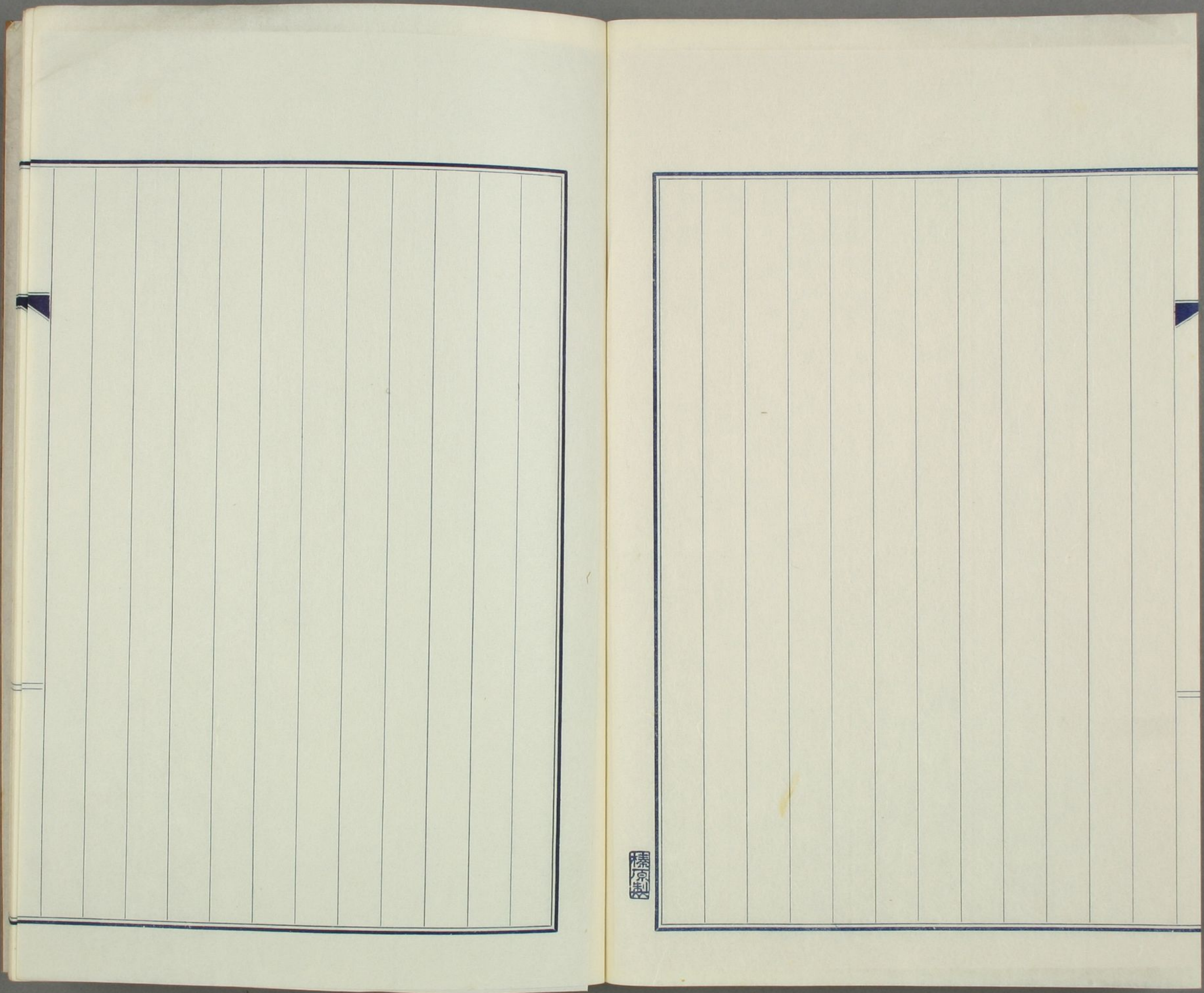
## 御誕生と御命名を

## 宮中三殿に奉告

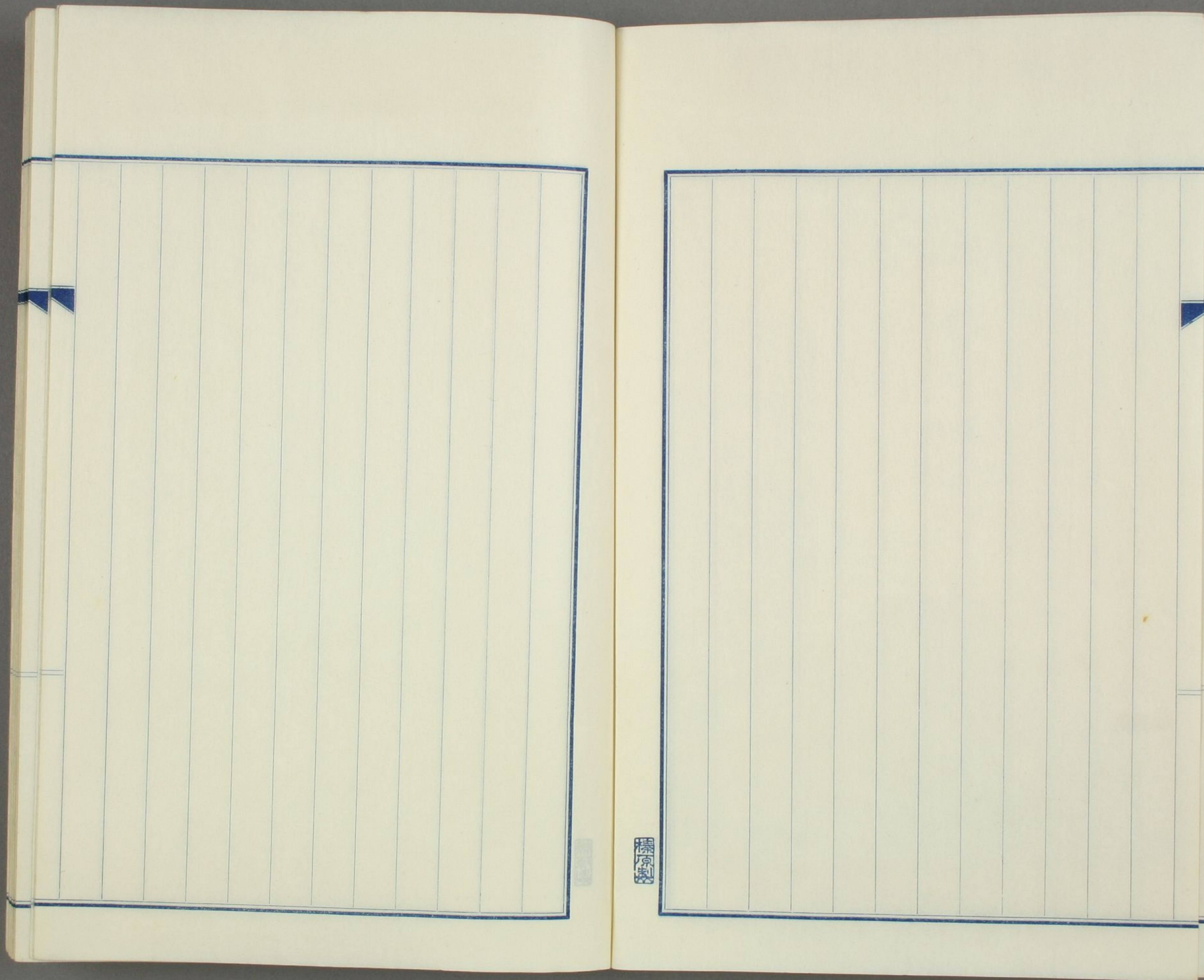
御命名の儀と同時に、宮中賢所、皇靈殿、神殿におかせられたはいとも森嚴に御誕生御命名奉告の儀が行はせられた、この且、三條掌典長、立花掌典次長以下奉仕し午前十時三十分莊重な神樂歌のうちに賢所の御開扉、續いて神饌を供し奉れば拜受した御名記、御稱號の御寫しを立花掌典次長が捧げて賢所に參入、同十一時、三條掌典長は恭しく皇太子殿下御命名の由を祝詞のうちに奏し奉り終つて皇靈殿、神殿に奉告の儀があつて滞りなく御儀を終へさせられた



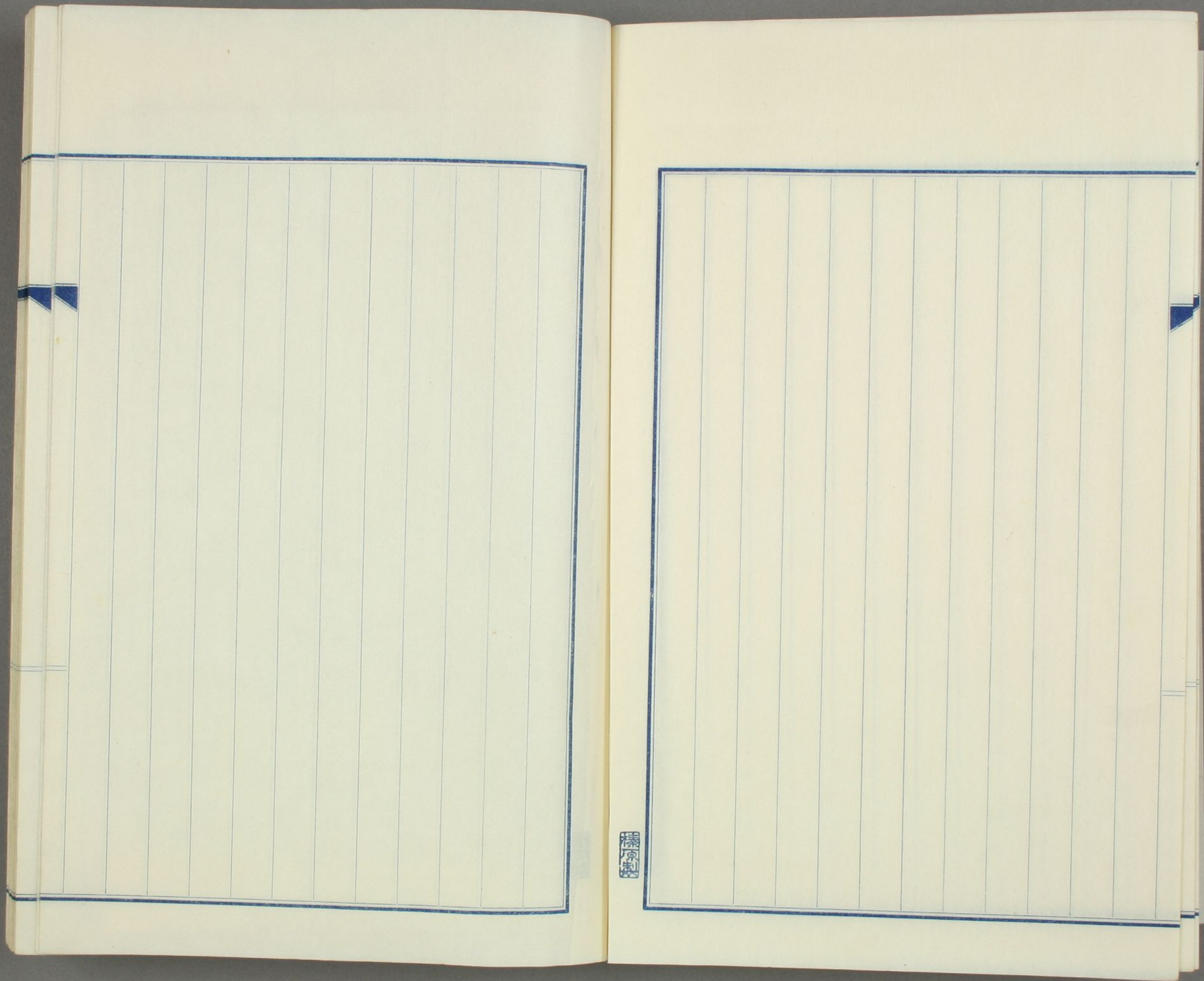




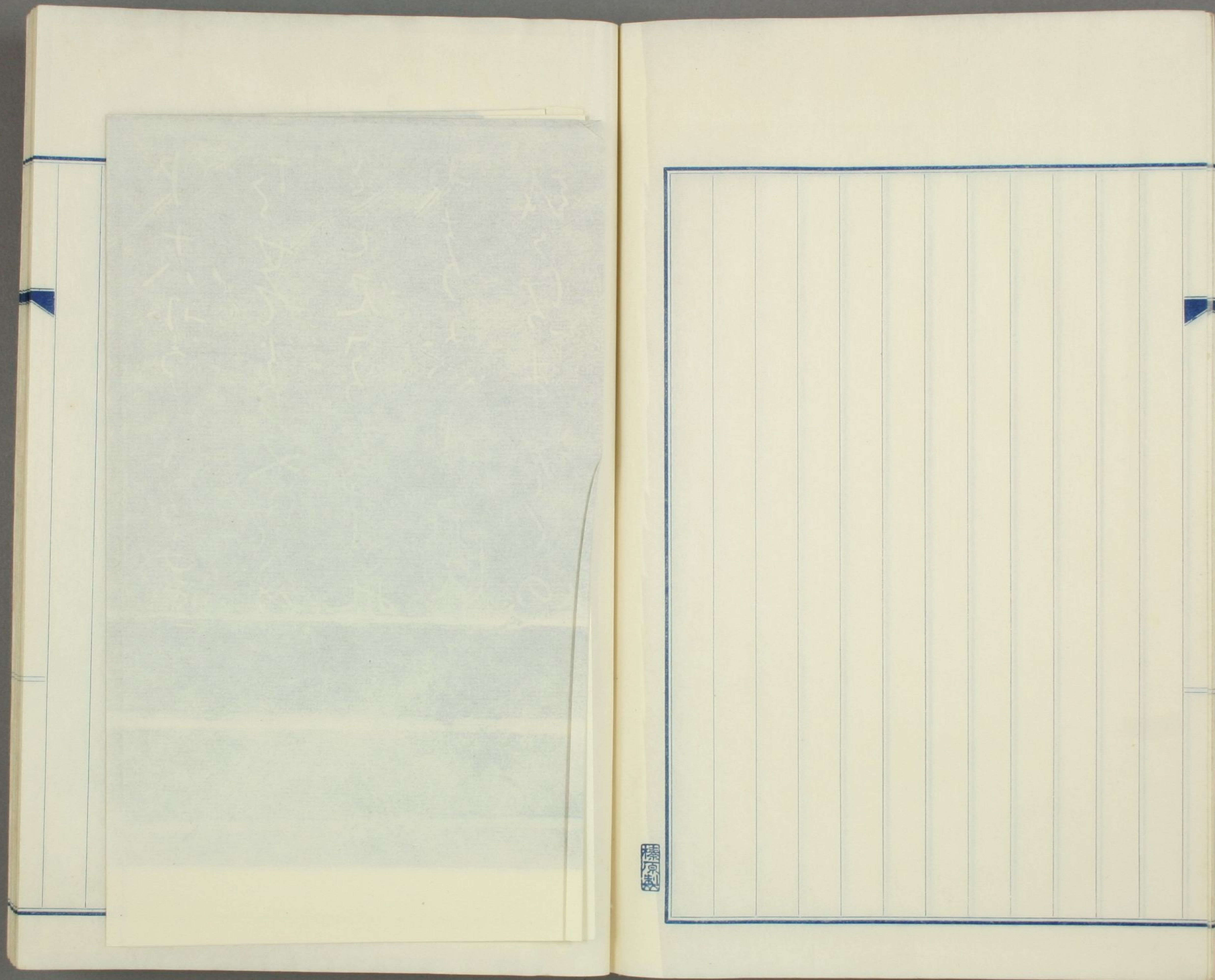
蘭  
文  
房



蘭

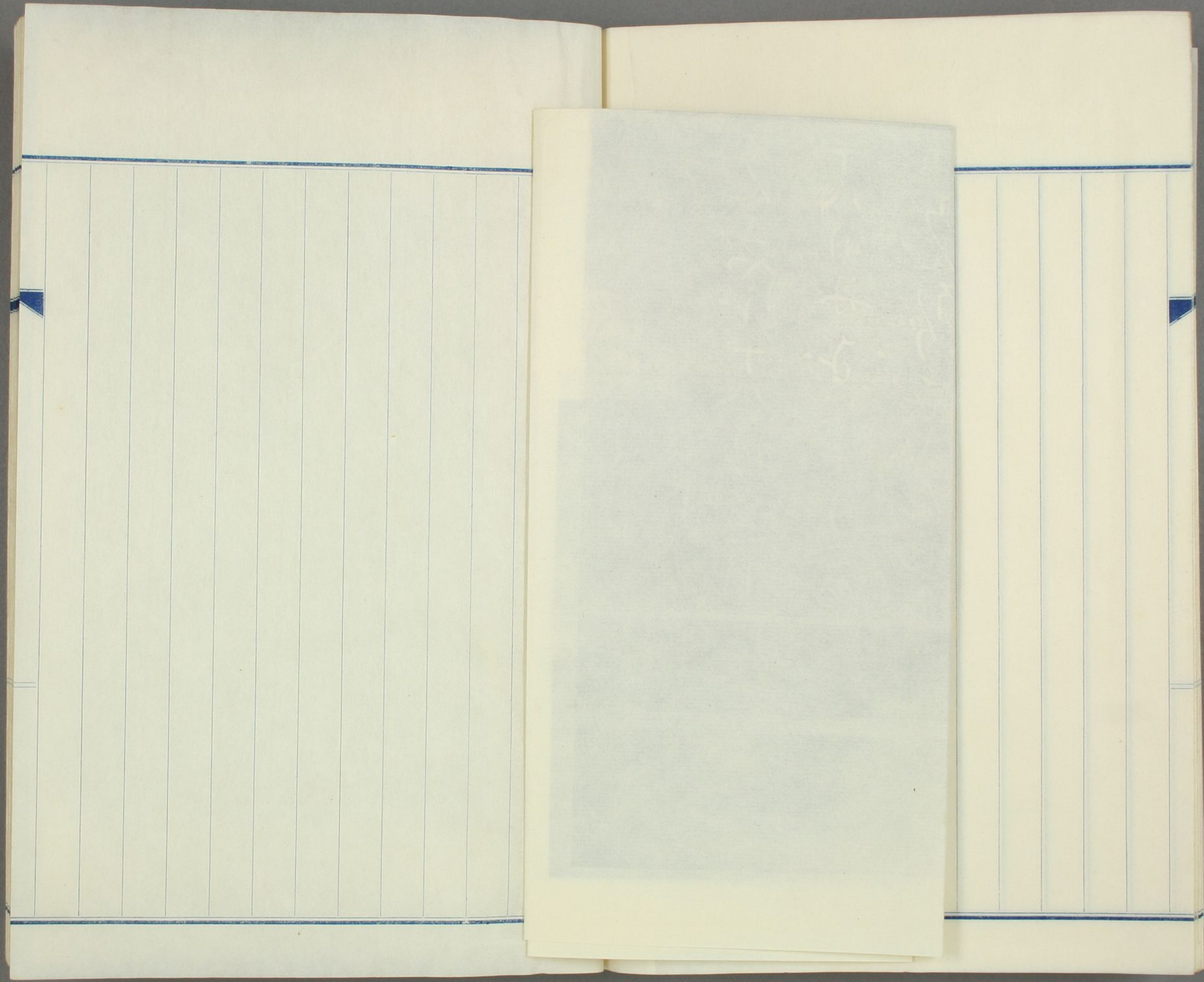


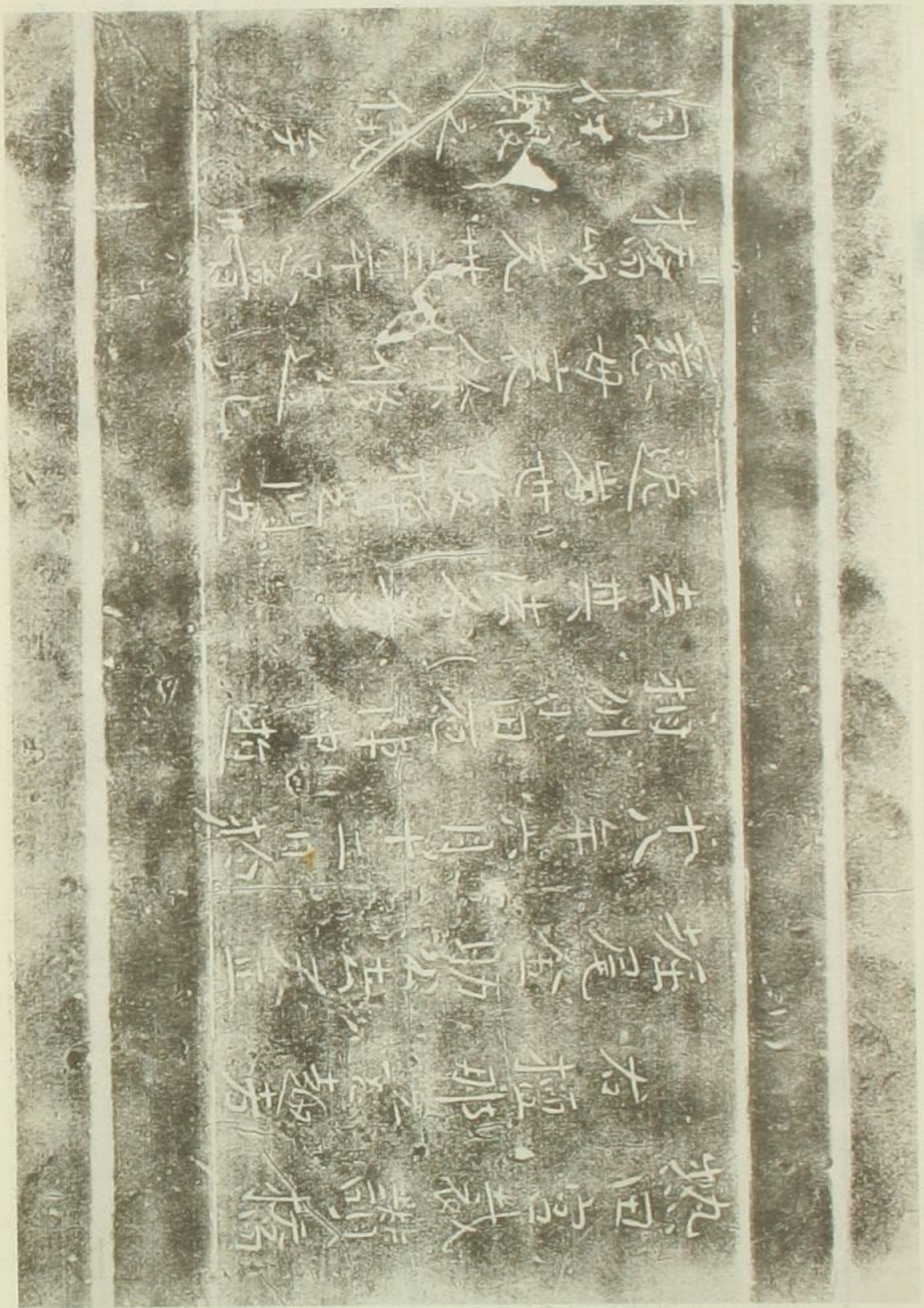
1911



清  
室  
藏







熱田神宮の橋談載

熱田神宮

裁談橋の葱寶珠

卅日の朝觀魚老、長谷川泰助氏、伊藤一正の三人の名古屋人を東道として熱田神宮に參詣して後、有名な裁談橋の葱寶珠を見るべく自動車で出かけた。

裁談橋と云つても今は全く川も無く、又橋がなくなつて、街道の左右に橋の有つた跡そのまゝに、四本の御影石の丸柱が建て、ある其上に、四口の唐銅葱寶珠が置かれてゐる。有名な假名文の銘は西方の………熱田神宮よりの南側に團子屋の軒下に一口あるのみで、他の三口は何れも漢文體の銘文であつた。

六七分の裁談橋は今僅う石を削りて是の葱寶珠を置いてあるのみであるが、この橋は城尾吉晴の息金助が小原原後に出陣する十八日、城を脱したのを母が夢に見、三十三回忌に此橋を修り、行路の人をこゝんを渡す時、此の丸柱の一處の圓向を修くと、呼びよせしもの香味を傳ふ文の刻し、此橋の今方其の葱寶珠とて、其後





情せられる。  
天正十八年から三十三年目は徳川二代將軍秀忠の時に當る。東北の葱寶珠の傍に、一尺角、高七尺許の御願石に左の文を彫りつけたものが建てられてゐる。

裁斷橋址

元和八年堀尾吉晴妻爲其子金助（以上正面、即ち南面）

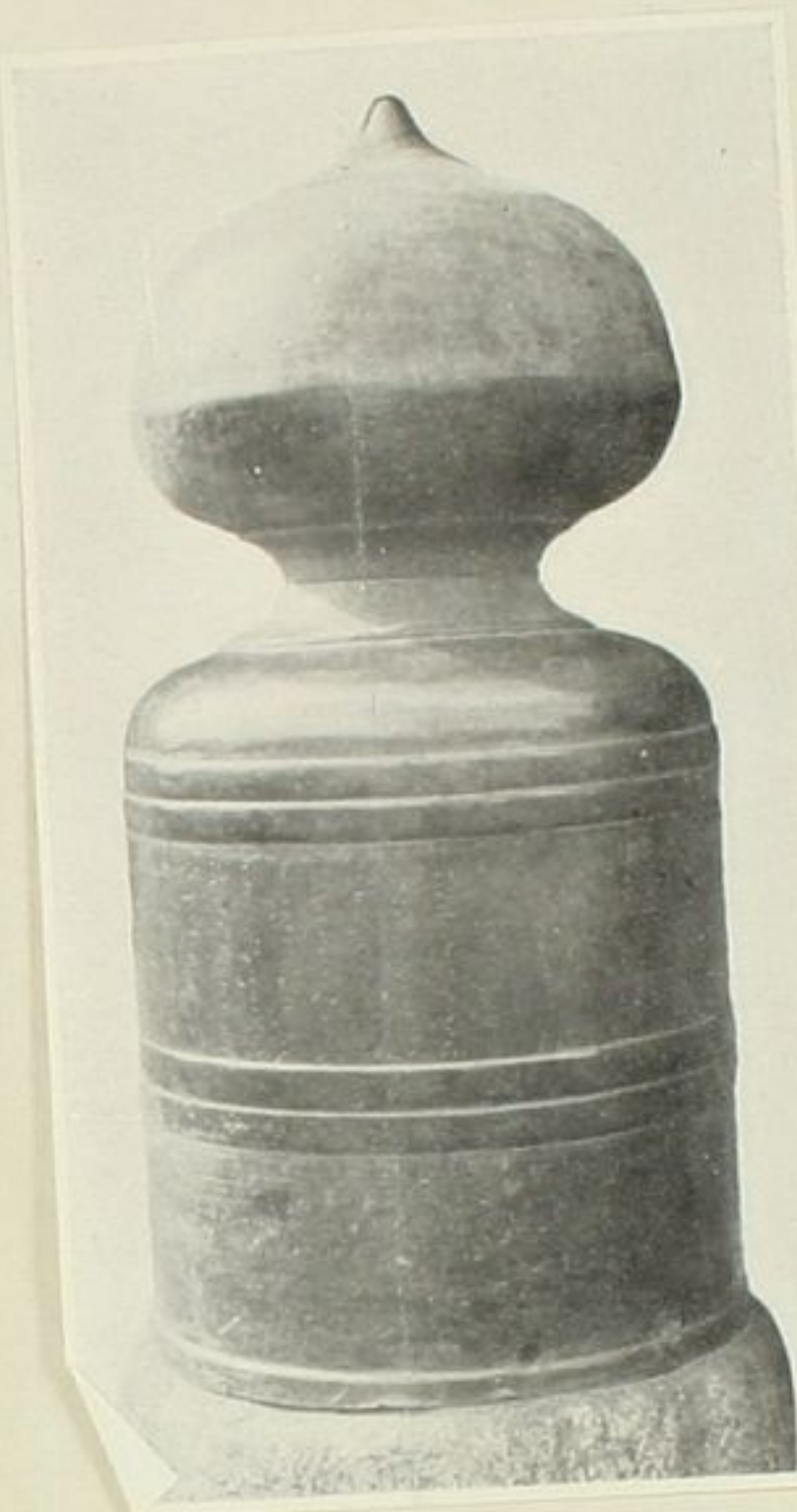
三十三回忌追善修造此橋此橋大正十五年精進川廢矣今樹石存舊蹟（以上向つて左、即ち西）

昭和六年三月 名古屋市（以上向つて右、即ち東）

堀尾金助の父が彌助吉晴であるか否か調べても見ないが、名古屋市のした事であるから間違ひはあるまい。濱田青陵博士の「橋」にもこのことが書かれてゐるといふ事だが、今に一讀の折を得ないでゐる。

此原稿を書いてゐる頃西下した長野埜志君と名古屋の伊藤一正君とに依て計測された寸法を左に略記して置く。

全高二尺三寸四分 石柱に連なる處の圓徑一尺一寸五分 胴徑一尺一寸三分 玉縁の高一分二厘半、寶珠直徑一尺〇六分、頸の括目徑四寸八分、肩迄の高一尺三寸二分。  
東京の手近にある葱寶珠との形式の相違を調査し



たら興味があらう、参考の爲に、拙著「日本鑄工史稿」から書ぬいて見る。

上野公園清水堂葱寶珠

寛永十三年

常盤橋のもの（今在芝離宮汐先橋）

明曆四年

本丸下乗橋

萬治元年

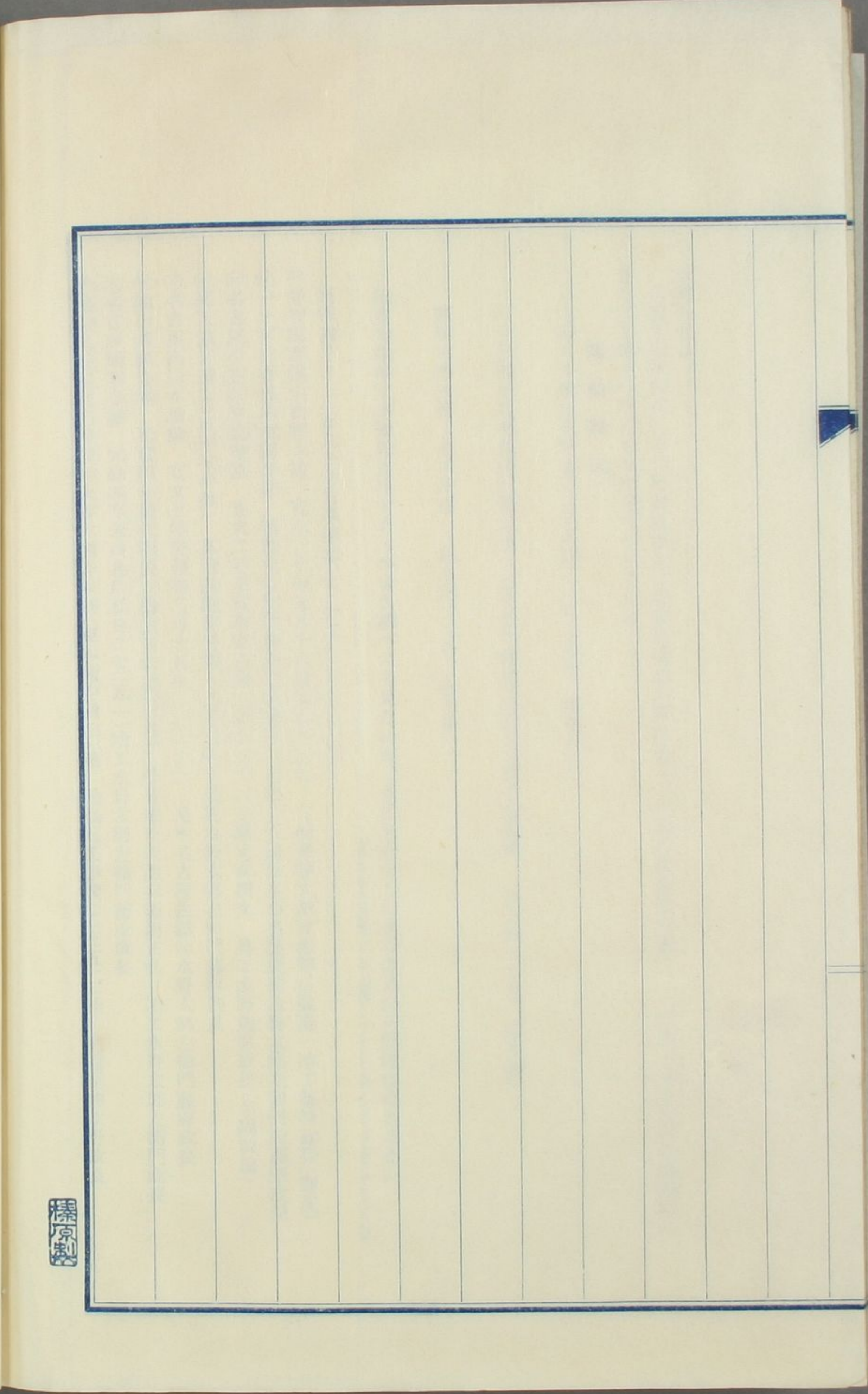
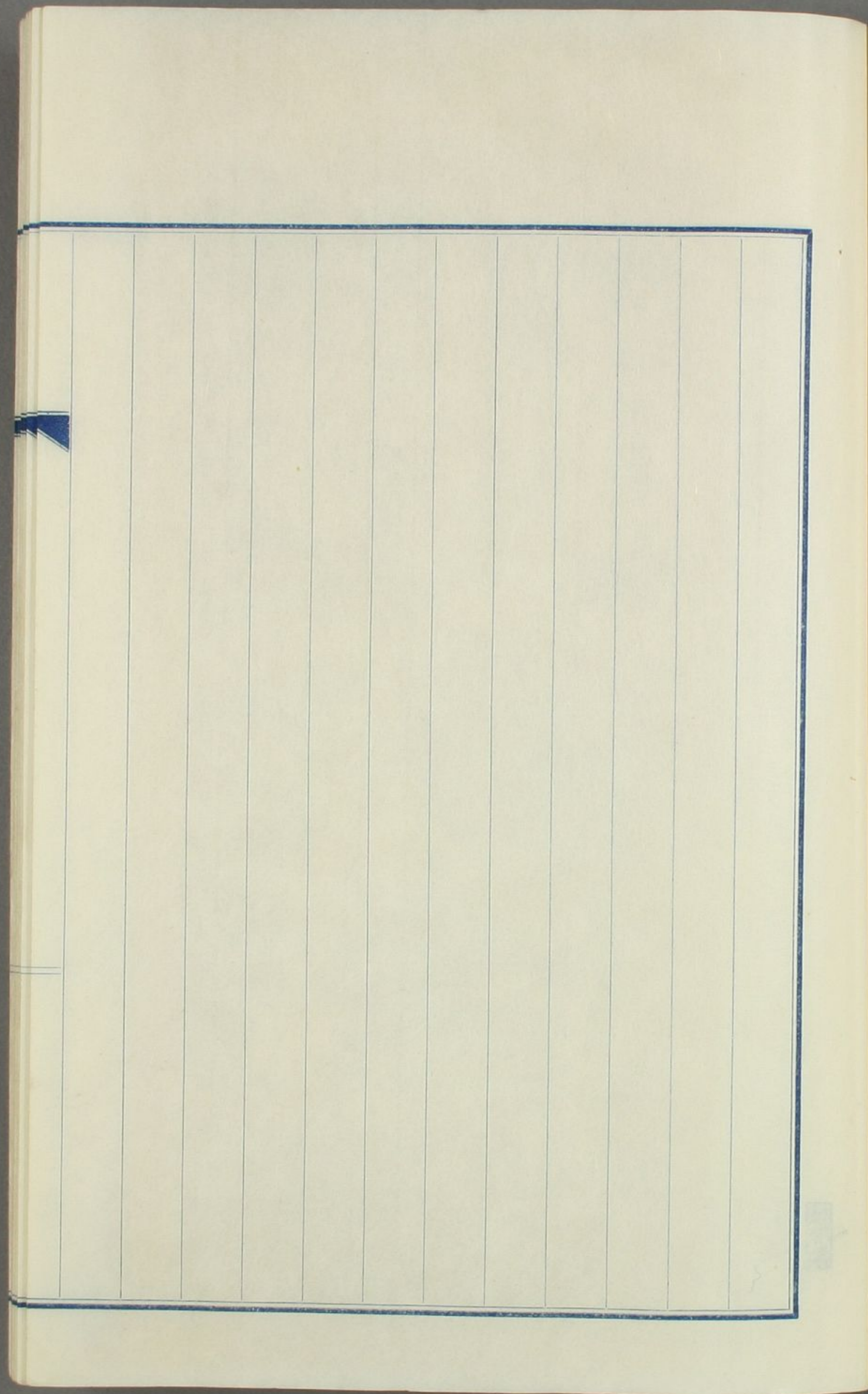
本丸大手橋

萬治二年

赤坂日枝神社

同

汐先橋と、辨慶橋とは、江戸時代のものが集められて居て、同時同處に江戸初期の形式を知る事が出来る。何と云つても葱寶珠の最も優秀であるのは、鎌倉時代の大和寶生寺の灌頂堂の厨子のものであらう。奈良法華寺厨子のものは豊臣秀頼造立のものである。鎌倉八幡宮には鎌倉時代の、花籠甲文銀象嵌のものが有つた筈だ。



かたはち北國の文壇



時事漫言

小精廬雜筆を讀む(2)

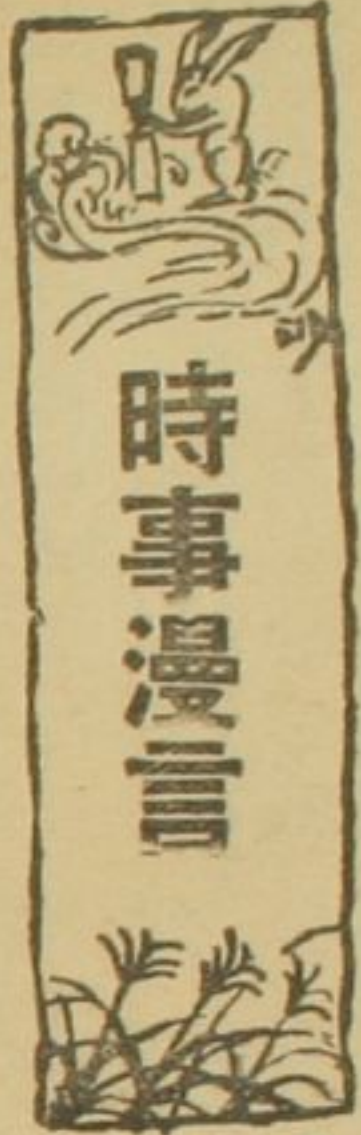
中橋徳五郎氏と市島謙吉氏

秋村生

中橋徳五郎氏對山章氏の選擧の法律科講師となつてをられた、戦には春城先生は義のため権山氏... 秋村生

の獨立に關係するが故とこの一言は當局者を驚駭せしめ... 松雲侯の罪蹟である。昭和四年のこと金澤市に全國圖書館協會の大會が開催せられたる時に春城先生は四高の講堂において松雲侯につき講演せられたるが... 松雲侯の罪蹟である。昭和四年のこと金澤市に全國圖書館協會の大會が開催せられたる時に春城先生は四高の講堂において松雲侯につき講演せられたるが...

藤原製



時事漫言

小精廬雜筆を讀む (3)

春城先生の政黨論講義

秋村生

春城先生は早大の産の親の一人だ。先生は正しく政黨論を明治であり、また政黨でもあつた。...

ないのは尤もの事である。

しかるに先生は今日の政黨あるを豫見してか又は立憲代議政治には政黨の必然的存在を認められ密蒙または指導のために政黨論の講義を...

れたが記者の羽織と先生の羽織が間違ふたる珍事が起り極めて記者は迷惑をしたことが昨日のやうに思はれてゐる其は兎も角として春城先生の早稲田タンポといはれてゐるのを爾後は若荷殿というて置ひたいと思ふ。...

東京



時事漫言

小精廬雜筆を讀む (4)

及び春城代醉録を

秋村生

石川縣立圖書館々長室の春城先生揮毫の額面に捺印のなきを披露せしは大なる誤りにて立派に捺してあるのを本月八日に親しく観た、それで取消しておく。...

たるは既記の通りであるが今度新に発行の春城代醉録にも松雲公につき(一三三頁)多くかゝれてをられる。これは往年全國圖書館會議にて來譯された際の演説の筆記である。...

して高田先生の上に市島先生が坐してゐるのは疑であるが實は君は水西を尊重せられたるによるか同趣味同主義によるものであるべし。...

春城代醉録の一四七頁に「モリス先生の「日本その日」を讀む」との長文がある、このモリス先生とは明治の初め米國より日本へ來られたる學者の中の最も優秀なる者の一人で進化論をわが國へ傳へたる偉人である。...

小精廬主人の好物はなかくに猪い實をいへば秋風萬葉悉く好物であると思つた方が適當であるかも知れぬ、就中、水西即ち醒睡は大好物の好物であるやうだ、...

日本產業協會評議員會並第十次產業貿易功勞者表彰式

順 序

昭和八年十一月三十日

於帝國ホテル

一、評 議 員 會

- 1 午後四時三十分 役 員 參 集
- 2 午後四時四十分 評 議 員 會 開 會  
昭和七年度業務報告並經費決算報告

二、第十次產業貿易功勞者表彰式

- 1 午 後 五 時 來賓、功勞者參集
- 2 午後五時十分 總裁宮殿下御着
- 3 午後五時三十分 表 彰 式  
(イ)總裁宮殿下表彰狀親授  
(ロ)令 旨  
(ハ)會長 答 辭  
(ニ)功勞者總代答辭  
(ホ)來 賓 祝 辭
- 4 午 後 六 時 賜 餐  
以 上

74  
 75  
 76  
 77  
 78  
 79  
 80  
 81  
 82  
 83  
 84  
 85  
 86  
 87  
 88  
 89  
 90  
 91  
 92  
 93  
 94  
 95  
 96  
 97  
 98  
 99  
 100

74  
 75  
 76  
 77  
 78  
 79  
 80  
 81  
 82  
 83  
 84  
 85  
 86  
 87  
 88  
 89  
 90  
 91  
 92  
 93  
 94  
 95  
 96  
 97  
 98  
 99  
 100

(照 参 頁 一 十)

宛 葉 紅 崎 尾 翰 書 雲 八 泉 小



○ 五米利加の金ふく禁酒令を布いたの千古未嘗あるの試び  
 ありて、辛州を先んが衛生のため特設道徳のみのこんをい  
 よい事い多いやうにあつた、こんをい行い難いこといある、  
 兎も南北の未嘗あるの事をも各海に実行して十年を既  
 此こと、珍ともいあるが、その結果たあつと思ひ  
 漢美の百出した、禁を犯す罪人、小強出して、容赦もあつた  
 又起り、酒酒悪酒をい、飲ちあつた、衛生を扱あつた、  
 強出して、あつた、禁をい行いんとする、春を助け、禁  
 酒令の大方、あつた、百米の金を扱して、せん、其、春  
 を助け、た、其の、あつた、盛ん、起る、を、え、て、い、跋、つ、て、湯  
 す、真、先、の、解、禁、を、主、張、す、る、あ、つ、た、以、て、函、府、も、道、  
 札、を、換、つ、て、大、使、館、改、遷、を、扱、つ、て、い、び、つ、て、い、ん、の、禁、を







## 熱河の學術調査

教授 德永重康

熱河に今回私共が赴いた目的は、純學問的の立場から自然科学の調査をするといふことであつた。即ち私共の専門と致すところの地質學、礦物學、岩石學、或は地理學及動物學、植物學、或は人類學、さういつたやうな方面の學術的調査であつた。併ながら私共が先方に行くと、自然に色々の經濟上の事物に遭遇する。例へば岩を調べても、その岩の中にはいつて居る所の金とか、或は石炭といふやうなものに自然と眼が觸れる。又植物などの専門の人で申せば、土地の工合とか、或は農業の關係なども自然に眼に觸れなければならぬ。又同時に動物の方から申しても、害虫とか益蟲とかいふやうなものも、多少は研究しなければならぬ。隨て吾々の調査は純學問的と言ふ以上に、尙ほ多少の實用のことも加味して居るのであるが、建前は純學問的の調といふ目的を以て吾々一行は進んだのであつた。一行の中にはその専門の人間が助手を併せて約二十名、それに匪賊の關係及其他色々の關係で保護を自分で行なければならぬといふ必要があり、その爲に團で特別に兵士を三十名、それを率ゐる少佐の人も御雇ひして、その人達及通譯も連れて行つたので總計六十餘名になつた。此六十餘名の人員に、先方に行くには第一に飯を擔いで行かなければならぬ、米の外に副食物を持つて行かなければならぬ。又天幕の用意、寝具の用意、かういふものを總て携帶したのであるから、それに伴ふ所の人夫といふやうなものを合せると、百名以上の人数になつた。百名以上の人数によつて斯の如き綜合的の學術的調査が外國に向つて我國で行はれたことは、蓋し初てであらう。而して斯の如き大人数

を連れて、土地不便の所、危険千萬の地域を三ヶ月間旅行したのであるから、危険に對する種々の豫備或は保護の關係上、文明の利器を應用する必要があり、併て學問上の諸種の打合せもあつたので、警備軍の方から無線電信の設備をして呉れた。又朝日新聞社からは飛行機を出して呉れた。これも私共が取つては、學問上非常な利益があつたのである。

熱河といふ所は非常に僻陬の地であつて、滿洲の中の一部、西南の隅約十分の一以内かと思ふ。洵に滿洲としては非常に小さい所であるが、北海道と臺灣と九州と四國、この四つを併せた位あるから、我國にとつては非常に大きい所である。こゝに興隆縣と申す所がある。これは縣の名前ではなく、今では町の名になつて居るが、大きな興隆縣中の興隆縣といふ町で、この興隆縣は近頃までは滿洲の中にはいつて居なかつた。所謂今の支那の領土であつたのである。然るに今回の停戰條約に依つて、萬里の長城を以て境とするといふことに取決められ、その結果興隆縣が自然に滿洲にはいつたので、所謂滿洲からすると新領土、而も今年になつてから初めて入つたといふ面白い歴史的の所である。而も此處は日本の人は軍人の外は吾々以前に殆どはいつたことがないのである。

私共は旅行としては甚だ難儀な旅行をしたのであるが、幸に旅行中に於いて、豫定の所を歩いて、自分達から申すと烏滸がましいのであるが、初め考へて居つたよりは、以上の收穫を得たのである。一例を申すと、植物などは八百種類も得た。こんな廣い所を三ヶ月間、自動車を走らすこと二千五百哩、歩いた所は五百哩で、植物の種類八百種とは少いのであるが、八百種類の中で二百何十種類、約三分の一近くはまだ學者が研究をし發表しない所の新しいものである。それからこの植物に就ての研究では、蒙古と南滿洲の二つに分れるさうであるが、兩方とも面白い種々のものがあるのである。承德の南の方、興隆縣の脇に五龍山といふ山がある。私共は熱河に學者として最初に調査に來たのであるから、熱河の一番高い山の上に記念の印を残さうといふこととしてをつたが、圖らずもこの五龍山が熱河中一番高い山であるといふことが分つた。高い所に登るといふのみが私共の目的ではないが、高い所に登れば動物、植物、岩石、地質も違ふだらうといふ、學問上の興味もあり、一つは記念の爲

め探險的に登つて見ようといふことになり、そのことを滿洲國の鄭總理に話した所が、鄭總理は記念として自分が名を付けてやらうと「天都峯」といふ名を附けられた。それを石に刻して擔いで行つて、山上で日滿の國旗を交錯さして、宮城に向つて遙拜をなし、萬歳を三唱した。この五龍山では植物の面白いものを澤山見附けたのである。こゝに森林が今も残つて居る。森林は今五龍山と圍場の所に僅か残つて居る位であるが、これもどん／＼採つて居るから、遠からずなくなるかも知れぬが、今では植物の大事なものが残つて居る場所である。それから植物の外に林業の保護を考へなければならぬので、どういふ木が残つて居るか、木としては人間が植へた木の外に、自然的に生へて居る木は如何なるものであるかを調べて參つた。併し熱河地方は第一岩が多いのであるから、岩を先づ泥にして、それから木を植へなければならぬ。それには岩に生ずる草を植へて岩を泥にしなければならぬといふところから、岩に植へる草を調べて來た。それから同時に自然に生へて居る植物で應用出来るものを調べて來た。

熱河はもと非常に林があつたさうで、三百年ばかり前の乾隆皇帝の時分に作られた有名な世界的の珍書である四倉全書を見ると、熱江が山林に被はれて居ることを書いてゐる。さういふ森林を監督するやうな村が澤山出來て居て、ずつとその森林の外側を廻つてあつたのが圍場であつたさうであるが、今では圍場が一つになつて木もなくなつて居る。その近邊には昔大森林があつて、種々雑多の動物が居つた。豹とか狼とか大變な種類があつた。非常な大森林で千古斧鉞を入れざる所であつたといふことになつて居るが、今度行つて見ると、林といふものが殆んどない。それは何百年前からだん／＼と盜伐をやつた爲であらうが、殊に民國の世になつてから益々そのことが盛になり、見る限り木を切つてしまつたのである。無論泥棒が切るのだから、後を植へるといふことはしない。切りつばなしである。そこに一年に一月位は殺人的の豪雨が降り、木がない所に傾斜がひどい山は瀧の如く雨が流れて、忽ち山骨を現はし、そこに木は愚か草も生へないといふ、ひどい荒蕪たる状況を呈するので、私共が行つた所は見る限り秃山で、ごつ／＼した山を旅行するやうな氣がした。但しその泥がだん／＼下つて、幾らか傾斜の緩いところに溜り、これを支那人は實に驚くべき根氣を以て高粱を植へ、粟を植えて耕作をして居る。こんなところを除ては

山中に行つては耕作地といふものは殆ど見付からないのである。

植物が貧弱であると同時に、動物も非常に貧弱で、洵に困難をして採集したのが五百種類位、獸は非常に少いので、多くは蟲のやうなもので、それを研究して貰つた。動物の分布状態を調べて見ると、赤峰の南が境となつて南北に分れる。北の動物の種類はシベリヤ方面と關係があり、南の方は南滿洲と關係があり、同時に北平、南支、中部支那あたりと關係があるといふ結論を得た。

その外に細かいことで、専門の地質學の方を申すと、これも非常に面白いもので、丁度岩の分布は支那の方の地質と、南滿洲の地質と聯絡をうまく付けて居たといふ結論になる。南滿洲邊の地質は日本人に依つて研究されて居り、支那邊は外國人、支那人に依つて研究されて居るが、熱河が未だ調べられずに残つて居つた。即ち未見地の所であつたのが連鎖を得たといふのである。その結論を申すと、一番古い岩の御影石と片磨岩といふ石があるが、片磨岩中に金が澤山含まれてゐる。熱河に金鑛が澤山あると言はれてゐるが、興隆縣では六、七百人からの人夫が盛に掘つて居つた。此處が有利な所であるといふことは私共が今度初めて發表した所である。そんなに金の多い所を滿洲國の人も、日本人も知らなかつたのである。採つた金は北平に賣つて居るので、滿洲が獨立して間もない今日、そんなに良い金山があることを知らなかつたといふ次第で、學問上未踏査の所であつた。それから平泉で砂金を掘つて居る。一體支那人は儲からなければ仕事はせぬので、彼等が仕事をしてゐるといふだけでも有望であるといふことになつたのであつて、今後熱河の片磨岩のある所を調べて、その中から金なら金だけを採るといふ段取にならなければならぬ。私共行つて大きな數多い金山を發見したが、それ等は仕事をして果して有望であるや否やは別の問題である。それから學問上で言ふ侏羅紀、その次に所謂白堊紀があるが、その侏羅紀の時分に火山の活動があつたので熱河中その火山の活動の跡がある。それは侏羅紀の時分から次の白堊紀の間に互つて大活動を起したので、その間に大きな湖水が出來て、その湖水が各所に残り、湖水の中に木や草が落込んで石炭になつたのである。それが熱河の赤峰炭田、北炭炭田

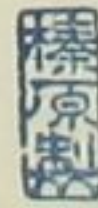
で、その他幾らもある炭田はその時分に出来たものである。湖水があつたから魚が非常に居つたもので、その魚の何億何千といふ化石が発見された。熱河に石油があるかどうかは大問題であるが、本當の石油は出ない。將來は知らぬ、今までは出ない。凌源の南の所にオイルセールを採る油母頁岩が出る。斯ういふ所は三ヶ所あるが、その油母頁岩の地層は魚の化石のある地層と關係があるやうに思ふ。魚を含む非常に新しい一種の白堊紀といふ間の地層の中に、さういふオイルを加へて居ることを感じる。今後熱河に石油の本源であるオイルセールを見付けやうといふならば、さういふやうな地層を探して、それから更に根氣よく分析をして見付けるといふ段取をしなければ、急に善いものを見付けようとしても不可能である。それ程熱河は調べられてゐない。大體の調査が出来ないのに、いきなり金の良いものを探さう、石油の良いものを探さうといふことは無謀のことではないかと思ふ。

◇

人類の遺物といふものは、一つの學問上から非常に興味がある。人間の祖先は何時、何處で發祥したものかといふことは、所謂人類學の學問上の最も根本の目的であるが、北平の傍四五里の所の周口店といふ所で、非常に古い舊石器時代の遺物が出たのである。その遺物が一所に見付かつたので、何處かに又ありはせぬか、熱河にありはせぬか、或は外蒙古にありはせぬかといふことで、學者としてはその點に於ても熱河は面白い處としてゐる。現にアンドリウスといふ人のアメリカの探險隊が外蒙古に七回行つた。目的は澤山あつたらうが、一つは古代人類の祖先を見付けるといふことである。私は昨年米國に行つてアンドリウスに會つた時に、今度は何とかして見付けたいと言つて居つた。その次の新石器時代の遺物、それは日本にある石器時代と同じであるが、さういふものは至る所にある。實に驚くべき程澤山蒙古の沙漠の中に石器時代の遺物が、砂の中に發見される。その時分の人間の骨までも見付けた。多分その時分の蒙古は草も木も生へ、人間が住むに最も適當であつたと想像される。新石器時代の遺物は見付けたが、もう一つ古い舊石器時代のもの即ち北平を少し離れた所にあつたと同じ遺物も又ハルビンで六月に見付けた。獸の種類が五十何種類もあり、その中には人間の遺物も随分見付けた。その時分の人間は獸を捕へ、



昨日は御手教系拜誦候處高作教首御贈被下取  
 仁存義之後御田盟へ方配候様致承知候  
 明日御登程之由兼て覺後罷在候得共御殘惜事  
 二御座候居生之身無據再拜別も難陳遺憾之至  
 歎息之外無他事候最後之一著は只平常に比す  
 凡日一陳精神を収斂して沈静よして勇決を主  
 とす事第一と承候必死勇闘之湯は口中泥一  
 舌乾る言諺不爽と申候梅干二ツ三ツ實をぬき  
 懐中より袖中より御田心是む大事と申承り候



成就之後他人に對し奉と陳候は聲不出事也  
 有之候而は見苦難候間申陳候  
 一先生へ御向被成業御遺憾之由先生も此事  
 承り候り悲傷と奉存候儀委細に可申通候  
 御年誦御認候り心御残し智下存候  
 義之重き所は死すべし御不幸不免とか  
 御悲御安中候乍存義に依て生死するは志士  
 の常にて戦陣無勇一之不孝と鄰國公之諺も候  
 へに可死に死すは道にて道に當るは孝と可  
 申候は白能有養を以て孝とすは若の目には不孝

此可申候作君臣之大義變三處する事は孝  
 子之不孝不得止候  
 詩歌共御精神の程感心いたし候南木二公是我  
 師之御句僕と御同論に候故御示し之由別而恭  
 奉存候向後楠公之如き輔佐勅用興之事御同意  
 懇願いたし候一橋公或は尾の老公蔭長後肥  
 前落然之老公仙臺落杯いづれ元弘之時  
 此すれは劣る中間敷天下之離叛心を懐き  
 者も少間不遠お崩之勢に可相成間其節地  
 下に相見今日も御款話可申候



次高韻

冠履倒置軍國難言 聖旨抑塞不得休  
 神怒人怨敗在近 誰道悠悠歲日流  
 秋思斷腸臨楮只秋、言不盡並忘候  
 十二月十九日  
 頓首再拜

白田大作

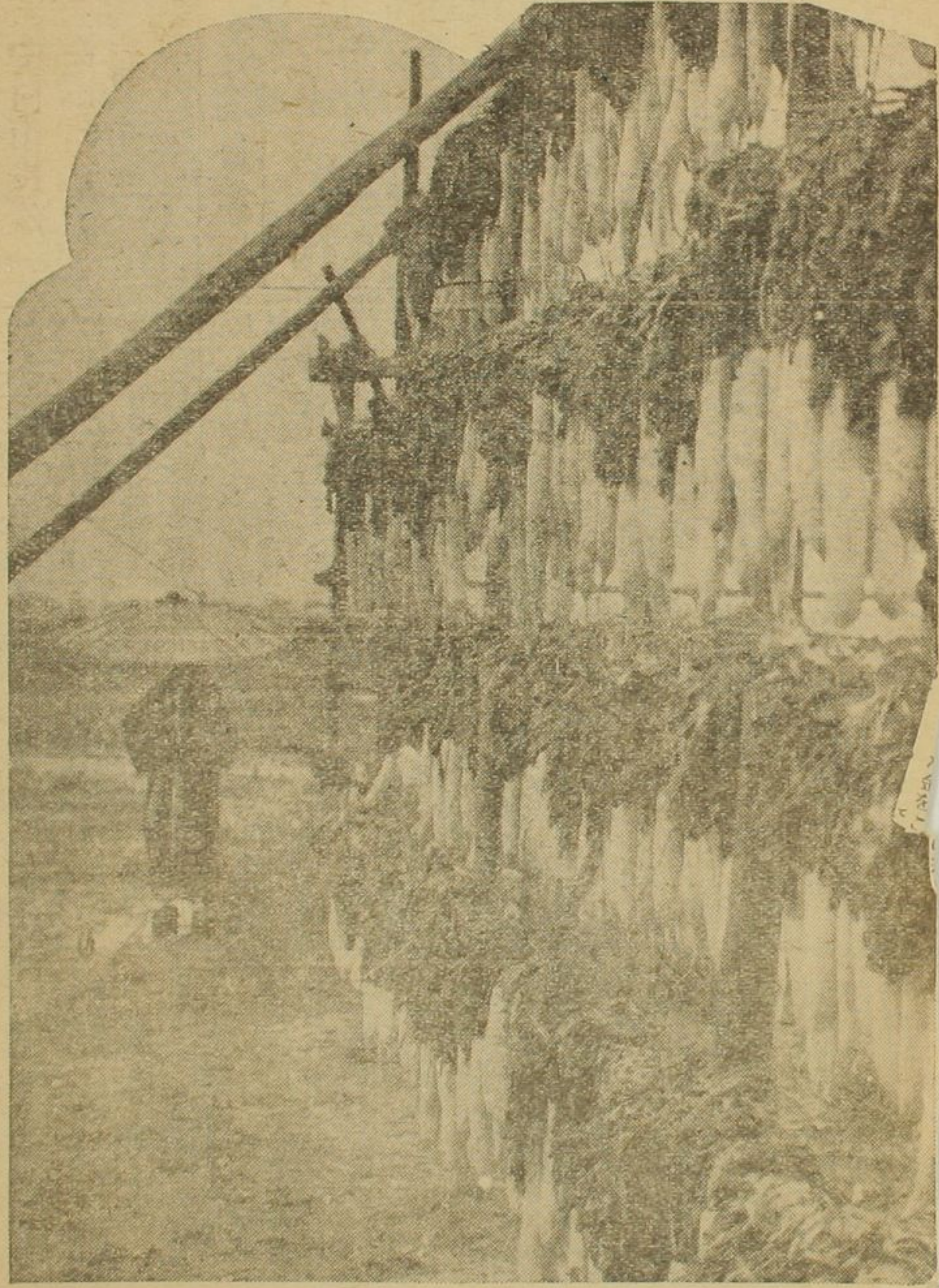
葦原性

白田リ縣六石

葦原川兒島草臣(強)

此片體 水戸大洗  
 菅野陽明治紀念館所藏  
 田中青山先生書寫

□□ 彌彦嶺時雨に消えて暮れにけり

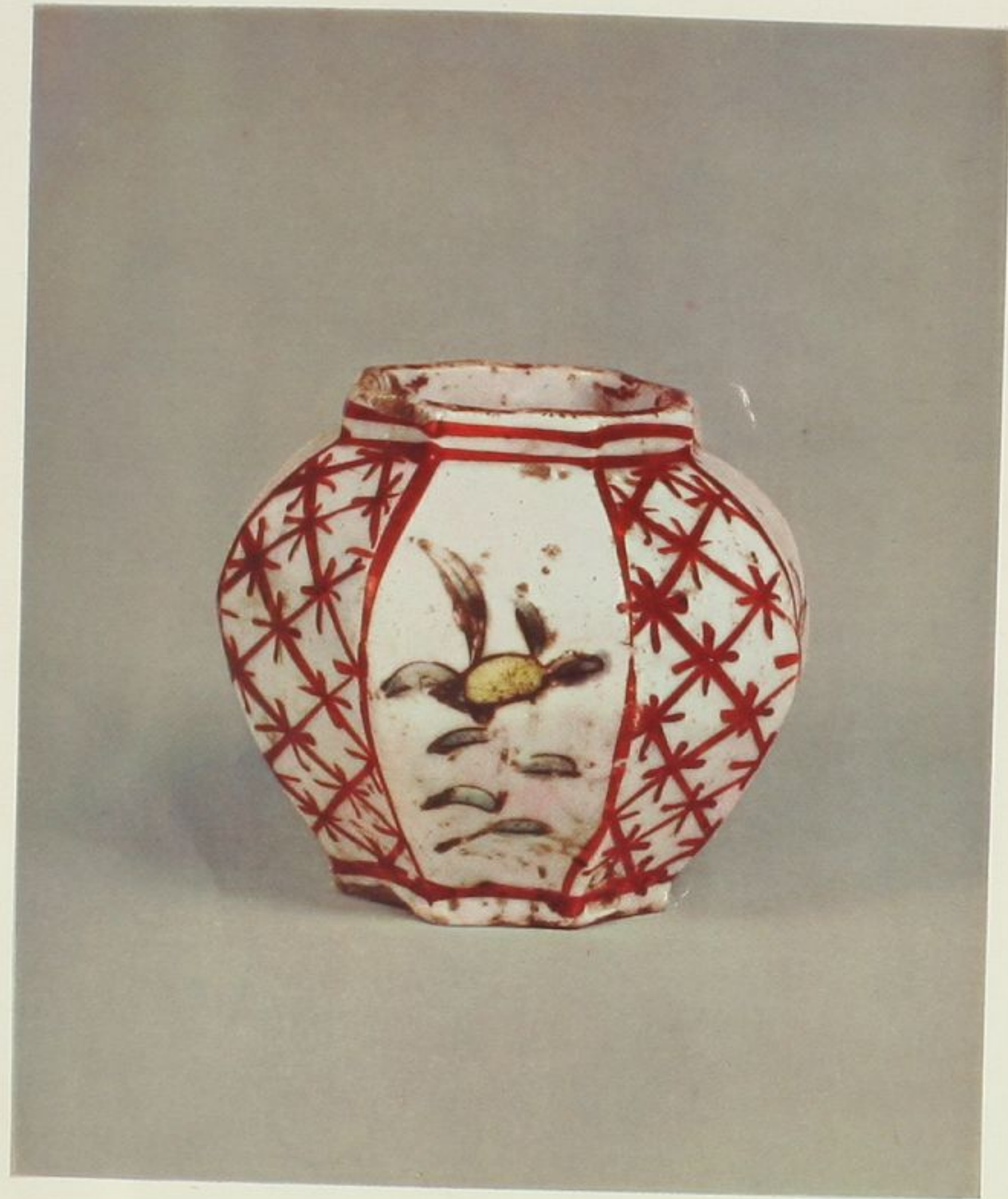




もうお正月の用意

のメ細作りだけでも毎年相場の収入をあげてみると云ふから素晴らしい、寫眞は製作中の處

もう一月で新しい年を迎へる——大東京市民の門松や神棚に飾付けら  
れるメ細は葛飾の小岩と行徳のお百姓さんが御嶽に御念がな、こ  
入れが済むと直ぐに老いも若いも一家をあげて製作に際意がな、こ



古九谷小壺

京都 便利堂 印行



